

元和元年乙卯 七月十三日改元

同八月四日 大御所様京御立

七月十九日 將軍様伏見御立江戸へ御下向有此日長原御

泊廿日佐和山御泊廿一日赤坂御泊廿二日岐阜御泊岐阜

川鶴をつかわせ御見物被成御供之間 内藤甚八 市川傳三

郎致喧嘩両方打果相果

廿三日名護屋 廿五日岡崎 廿六日吉田 廿七日濱松 廿八

日懸川 廿九日田中 晦日清水 八月朔日三嶋 二日箱根

三日藤沢 四日江戸へ 還御

七月廿九日於京妙顯寺岡越前守切腹被仰付子息平

内へ御成敗明石掃部掾

同廿九日氏家内膳子息於京妙覺寺切腹

同日德善院孫於高安寺切腹

八月廿日大坂之姫君江戸へ御下着七月晦日伏見を御出

安藤對馬守御供なつか阿茶局以下女中ちやう百人御供也去五

月七日城炎上之時秀頼御袋より女房二人刑部卿侍 侍二

人堀内主水 等を御附御所様之御陣へ御送り被成候五月八

日二条へ御移被成同九日伏見へ御坐御供参候左門主水

兩人へ將軍様へ召知行五百石令拜領候處南部左

門者本南部信濃守家来ニ深きかまひ御坐候て中々連

御訴訟申上候間不被召出黄金五十枚被下候此左門事

元来信濃守小小姓より仕たて申候處 重科仕令欠落京

都ニかくれ罷在候間南部信濃守何とそ尋出し可致成

敗由申付南部久左衛門と申者を京都へ指上せ置申右

之左門を称らひ相尋罷在候其頃大坂殊之外きわたち

申候ニ付左様之浪人躰之者京都に徘徊申事伊賀守

堅御法度ニ申付候間久左衛門京都居住不叶溝口外記久

敷知人ニ候間久左衛門方より外記を頼申候ニ付溝口外

記右之様子委細存候間此者南部信濃守家来ニて左門打

手ニ罷上候處粉無之候以來惣事も候はば我等ニ御懸り可

有由板倉伊賀守方へ一札を遣し候間伊賀守無相違

久左衛門京都に指置被申候然右之左門大坂へ令籠城

扱又久左衛門も奥州之方にて人之存知たる者ニ候間大

坂より色々すかし音信をいたし高知ら朱印を秀頼ノ

給はり候ニ付久左衛門主之使ニ召参大慾をかまへ忽大坂

へ入彼左門と令和談一組之組頭仕候今度大坂落城之際
南部信濃守此旨達 上聞彼久左衛門尋候へ者落城之
時丹波へ落行かくれ罷在候を申上召捕候て待之法を背
候ニ付京都を引渡火あふりに仕候

右之外記か一札伊賀守方より出申候間外記へ改易仕候

南部左門も根本之罪人候間南部信濃守達ニ申請成敗可仕

旨言上仕候得共今度御姫様之御供申御陣中参候事無

比類御忠節ニ左門命を御助金子致拜領浪人ニ紀

州へ参り主水へ被召知行五百石被下其主水兄之

堀内若狭と申者も大坂令籠城落城之際大坂口ニ生

捕候て已ニ成敗ニ及候處弟御忠節仕候故命を御助被成

追放也

八月四日午刻 大御所様京都を御出申刻膳所着御同五日

自矢橋御舟ニ水口ニ御着今日御陣所御上路之割草津森山

ニ上総介殿御旅宿之前にて將軍様衆長坂六兵衛ちやう伊

丹弥藏と申者喧嘩仕上総殿衆ニ理不尽ニうたれ申候由聞

召本多上野ニ御尋被成候處努々不存由申上候間則所之代

寫長野内蔵助小野宗左衛門ニ被仰付所之者に御尋候へ者何

も右うたれ候衆上総殿御休を不存傳馬ニ乘急候て通り候

處を乗打狼藉仕由申大勢押懸切殺申候由委細達

上聞候間殊之外御立腹也

六日七日八日御逗留九日勢州龜山御泊十日名護屋ニ御着

十一十二御逗留於濃州御知行三万石御加増宰相殿ニ被遣

十三日岡崎御泊道中御逗留廿三日駿府御着翌日於大坂

表御供之衆剛臆之次第最眞偏頗無之以誓紙入札ニ仕へく

由被仰付

九月小 朔日 大御所様松平忠左衛門を御教寄屋へ被召越

後へ御上使被遣忠左衛門父大隅上総殿之御家老故忠左衛門

を以御勘道之由被仰遣御意之趣誰も不承候へ共今度大

坂ニ一戦之割御連参ニ御逢ふ被成御合戦以後御

着刻又御人数崩其上味方打少々仕御上落之時分於森山

將軍様御家来衆を御成敗其喧嘩相手をも切腹不被仰付

候事共と及求處也

九月八日從 將軍様水野監物為御使九日之御礼被仰上

呉服御進上

一 上総殿へ 將軍様御立之日京御立北国通を越後江御帰国被
成候處以鈴木刑部御使者として江戸へ被遣自 將軍様松

平内膳為上使越後へ致発足處松平忠左衛門

大御所様為御使先山條之城へ着父大隅政同道上総殿へ参

大御所様上意之趣申上上総殿御之外 御仰天被成御陣法

之御返答数ヶ条被仰上間忠左衛門九月十日ニ駿府へ罷帰

御返事申上候 弥 御所様御立腹被成御勘道之由被仰出

間上総殿越後を御出被成武州深谷へ御籠居被成御詫

言被仰上

一 肥後国之昔の主龍造寺隆信之孫龍造寺駿河隆房今

度も大坂御陣へ御供申是者本領を今家来鍋嶋信濃父

子被為押領御返可被下由近手御訴訟申上江戸ニ御詰申

候處此御陣付ニ陣屋を別に構へ申候へ鍋嶋方より申上

鍋嶋陣下ニ仕旗下一組小屋相渡申候是を無念ニ存去三

月京へ罷帰自害仕候處家来共大勢取付相留候處御陣

相濟江戸へ罷下終ニ九月六日妻女を刺殺切腹相果申

候今迄肥前窪田と申所五千石領知仕候由

一 九月廿四日江戸桜田筋毛利長門宅より火事出政宗嶋津鍋

嶋等類火 同廿九日 大御所様江戸御下向路次御鷹野

十月三日三嶋迄御座安藤對馬紙從江戸為御迎参向近藤

石見小田原より箱根へ参向同九日神奈川迄御下

將軍様為御迎金藏院迄為御迎御出御對面御先へ御帰

十日江戸へ御着 將軍様西丸へ御出 十五日御本丸へ

大御所様御成十八日西丸ニ法問御聽聞 廿一日戸田へ

御鷹野ニ御出それより方々御鷹野

一 上総殿深谷ニ御坐候へ共 大御所様御鷹場ニ近所之間

不可然之由ニ上州藤岡ニ御坐被成小大膳古屋敷ニ御籠

居被成十一月廿七日 大御所様御鷹野より江戸へ還御

本多佐渡守老病難儀之處少致快奉申付 御前江罷

出候間 大御所様御機嫌御快然

一 十二月三日 將軍様西丸江御出御密談有是ハ上総殿御事

かと申候

一 四日 大御所様江戸を御出稻毛筋御鷹野被成十三日小

田原迄還御十四日三嶋着御 十五日御吉日之間御隱居

所御見立可被成由被仰出十五日三嶋之西泉頭と申所御隱

同
同組^二面 討死之衆

かり組頭

松平庄九郎
松平助十郎

梁田平七郎

是ハ關東來開宿之城主河内守千也
佐竹^二居申候を慶長七年被召出村上總
千石様仕候
十九歳未御番は不仕候得共父同道^二面出陣仕候

同 子息権三郎
山崎助次郎

同組^二面 御改易之衆

山口小平次

土橋孫六

杵山三右衛門

堀田清十郎

高木主水正組

山田清太夫

五百石

権田平大夫

渡邊平六

兼松弥五左衛門

金田宗八

寛助兵衛

高木茂右衛門

高木忠右衛門

近藤重藏

林藤四郎

大岡忠四郎

米倉小傳次

筒井甚之助

間宮庄五郎

一 普沼主殿助高名仕候得共いんけん申候故御にくみ被成

一 御加増不被下候

一 青山善四郎御軍法をやふり源入仕候^二付御改易被仰付

一 右之時分御改易之衆

是ハ四月十二日於伏見
父子被仰付

溝口外記

城 和泉
羽柴勘右衛門

此人寛永九年七月
十七日御免許

溝口半左衛門
同 新三

保坂重右衛門

伊奈右馬允

庄田三大夫

本田傳三郎

西山清兵衛

寛勘右衛門

戸田藤五郎

三浦権六

山田十大夫

中山勘ヶ由

安藤甚助

中山助六

稲垣藤七

朝比奈弥一

安藤与八

荒木孫九郎

大久保新八

跡部民部

御所様御鎗奉行伊藤右馬允寛勘右衛門大久保彦左衛門御しかり被成候彦左衛門へ申わけ仕伊藤寛^二御勘道被成候

山上弥四郎田上右京兩人今度御陣中にてふり悪敷由風聞^二付^二諸人色々取沙汰申候間兩人引籠罷在大竹江左衛門を頼候て申わけ仕候得共取上無之候て終に兩人流牢仕候

田代養玄と申醫者今度安藤對馬今同道大坂へ參御先^二面高名仕候間則被召出御知行三百石被下御醫者^二被成候

田代元來常陸侍代々武功有之候て醫者も代々仕候古河香春濟田代三^二面何も武士^二面醫道も名人也養元も其一門にて宇都宮下妻邊^二面度々武功有之由申候

元和二年^{丙辰}
正月元日之御礼如常

二日御話初着座之次第如例

同廿三日曉天 大御所様一昨日より於田中御煩之由申來則青山伯耆守為御使被遣

右 大御所様田中へ御鷹野^二出御被成候處に京都より茶屋四郎次參候て御物語共申上候中^二京都^二面珍敷料理^者やり諸人仕候由申上何様之料理と御尋被成候茶屋申上候へ鯛をこまの油^二面あけ候てひかをすりかけ候被下候無比類風味の御坐候由御物語申上候其日榊原内記方より大鯛二本あま鯛三本令献上刻右之御料理被仰付あり候へ^者殊の外風味の候て御機嫌よく鯛を毎より多く被召上候へ^者二時程過候て御虫痛申候間御食傷奉御坐候間万病圓あかり候はんと御醫者片山与庵を召候間与庵も御供^二被參当所^二罷在候^二付^二面与庵宿尋申候処^二田中^二面尋逢不申程過候て參上申候間御機嫌悪御立服あり

御病奉之段從田中落合小平次為御使江戸へ被仰遣小平次則今癸足一日一夜^二江戸へ參着仕 將軍様御感不斜小平次時服拜領同廿四日御機嫌少の 大御所様駿府へ還御

上総殿藤岡より駿河へ被成御坐八幡^二御逼塞被成御袋其外女中を以御詫言候へ共

大御所様御返答無之女中衆を御国眼被成候由

二月朔日 將軍様江戸御立為御見廻道中御急同二日申刻着御則御目見 大御所様御大慶無限

大御所様へ御官位御轉位被成可被進由^二面禁中より廣橋大納言三條大納言兩人為 勅使太政大臣從一位^二御轉任被成三月廿七日 勅使參向

同廿九日御祝有之

御祝之次第

御三献之御引渡如常 但嚴立有

七五三出何も惣重御盃出御菓子出 何も嚴立有

右之後宰相殿中将殿少將殿着座

御盃之次第

一 初献御盃一ツ出
一 御盃 公方様被召上御盃宰相殿頂戴其盃廣橋大納言殿其次中将殿其次三條大納言殿其次少将殿被下納

一 同二献
御盃 公方様被召上中将殿頂戴三條殿其次少将殿其次廣橋宰相殿被納

一 同三献
御盃 公方様被召上少将殿其次廣橋殿其次宰相殿其次三条殿中将殿被納
右献々之内御前ひかへの間御はやし有之

一 高砂親世 呉服三十郎 善支
右相濟退出良伴御物有之
傳奏衆二人何も黄金五拾枚并小袖三十宛蓋居御前被拝領

一 右之献過数の御盃出
一 古公家衆新公家衆諸大名へ御盃被下候事
一 御装束之事 公方様赤御直垂御烏帽子宰相殿すいかん烏帽子中将殿少将殿も同前傳奏衆二人直垂烏帽子以上

一 御前給仕之衆 細川内記 井伊掃部頭 酒井下総守 鳥居讚岐守
一 御相伴衆之給仕 三好備中 西尾丹後 佐々木兵部 一尾淡路 一色左兵衛 朽木兵部

一 右之御祝已刻より未の刻迄御酒宴也
一 伊達政宗 大御所様御気色無御心許奉存早々国を罷出三月廿九日伊豆三嶋迄令參着駿府へ參上仕り度由御使者奉伺候得 早々參府可致之由上意 卯月二日駿府感應寺

一 令旅宿 大御所様御目見して不大形御機嫌 忝上意共承難有仕合之申候堀丹後守も御目見ありて難有上意之由 其後御気色少重御坐候て何 御目見無之本多佐渡守於江戸散々相煩御見廻不罷上難義仕候

一 三月十五日
一 卯月十七日終御他界御年七十五
一 同国久能山奉納御遺言にて神奉崇御代々浄土宗

江戸増上寺源著上人より五重血脈御相傳候へ共近年天台宗之佛法御聴聞南光坊僧正天海を崇敬被成其上神道迄御傳受被成候間 大権現崇申久能山御宮立榊原内記を為御宮仕付おかせらる久能山上古より真言之寺 代々名僧共此寺より出事多し今度又御宮之社僧として天海より天台宗之学頭を置一山之中真言久能寺と号し天台社僧方と申則葉王大権現と申たてまつる

一 爰成事有 八郎右衛門と申御中間若輩より久敷御奉公を申上御馬の口を取敷度之御陣之御供を相勤御機嫌相叶度々忝上意共承難有次第之由常申けるか今度御他界之由を承我等躰御借其恐ありといへとも御跡をはたひ可申由組頭畔柳助九郎申断令切腹相果候寔寄特之由諸人感歎不斜子とも無之候

一 卯月廿五日 將軍様久能へ御參詣
一 同廿七日 公方様江戸へ御立同廿九日江戸へ 還御 御代浄土宗御坐候間増上寺にも御位牌を罷立 御玉屋御建立有号安国殿

一 大相國公一品徳蓮社崇善道和大居士
五月十八日より諸宗之出家増上寺へ參詣經有但し法花宗之僧徒共御訴詔申候者 相國様於増上寺御葬礼御座候はば無是非御誦經可參候得共久能 奉納候間久能へ參詣仕誦經仕度由御訴詔申候間左様候はば権現様頓日光へ御移被成候間日光山へ參詣經可仕由被仰出候間法花坊主皆日光山へ參申候是浄土宗と代々法論仕候故也

一 五月廿九日酒井備後守内藤若狭守青山伯耆守 若君様へ御附被成
一 六月七日日本多佐渡守七十九才卒
一 大御所様 五十日おくれ奉終如此
一 内藤紀伊守伏見御留主居被仰付

一 上総殿へ 大御所様御他界之間御存命之間御勘氣御免許無之候付駿河より又上州藤岡江御帰被成御逼塞被成御座候

一 同日阿部四郎五郎步行同心弓五十人被仰付高木九兵衛同心五十人被仰付鉄炮是右間宮左衛門預申候歩

行同心也

一 阿部弥一御走り衆三十人御預是右高木九兵衛御預候 六月十日上総殿御内衆花井主水安西右馬丞と申者御目安を上候て於 御前公事對決有花井主水上総殿御母方の御爪のはしをもけかし御家走分之仁右馬丞本は文右衛門と申候てかるき小身上上総殿之御意入此頃日付役三百石計の身上也公事安西方よりかけ申候

一 今度上総殿御陣へ御立之道森山
將軍様へ御目見得の為御出被成町へ御出御坐被成候御旅宿之前 將軍様小十人衆長坂六兵衛富士太兵衛伊丹弥藏此三人と上総殿衆致喧嘩右之三人を打果し申候其相手の本人 石谷縫殿之助預り候鳥見之衆一人富永大頭預申候歩行之衆一人山田將監組之者一人以上三人也其外其場へ馳付申候者数多有之然に此事間六月迄色々穿鑿候間右之三人之相手欠落申候今度上総殿御家來衆江戸御陣

一 中之儀右之喧嘩之儀も御尋被成候はば相手三人ながら欠落申定奉行共に御かかり可被成と致覚悟せんかたなく存此安西右馬丞上様より御附被成候衆にもあらず上総殿にて新參御取立之者也其上横目仕奉行衆私曲をも委細存候間殊更皆々にくみ何とそ越後開打いたし捨森山之喧嘩の相手に候間成敗仕候由可申と打手兩人申付候間右馬丞ひそかに是を聞越後を忍出江戸へ參奉行衆へ目安を捧申上候自分の公事とは不申今度大坂表主上総殿遅成被成手御逢ふ被成候事奉行共之曲事就中花井主水の私故也更上総殿之御曲事にあらず御身躰か様罷成候事餘り御笑止敷奉存と申上候間

一 將軍様御直御聞被成候
一 安西申今度五月五日上総殿へ政宗赤羽織之者使參申候所盤若寺より法隆寺之間にて御坐候政宗と上総殿間三里計され申候間御押付可被成由申来る山田隼人丞先手の花井主水押付候へと申渡す処主水遅仕五里ほどされ申候は主水一ツ之失也次令夜中 国府より政宗

一 の手紙參候は敵出張申候間御押付御合戦御初可然由御使番衆片倉小十郎被仰渡政宗も急国府へ押付申候間御押付可被成との儀也主水方より山田將監申渡候へ只

一 御押付可被成との儀也主水方より山田將監申渡候へ只

今御しつまり入候間少御目覚可申上とて時刻移り候て申上候間それより御押候へ者大軍おし申候間国府へ合戦過候て御着被成駿府へ山田將監計御改易被仰付候是主水方よりは非申上急御出し被成候へと不申上候事失の第二也上総殿へ何も急に押候へと被仰付松平大隅山田隼人松平出羽松平筑後御先へ段々押申候処主水参候へ我等去年冬之御陣之時御使上り候て惣責可有といはし候時様子悪敷之由江戸にて風聞仕候由口惜存候間今日御先を申請候由脇之道よりかけぬけかけぬけ御先へ参候て先手をおさへ村上周防溝口伯耆と続ておし申候間道へ殊之外大軍延引国府へ参候へ合戦も過敵後藤木村山口薄田其外最早打死之由申候是上総殿御油断にあらは主水か失第三也爰へ皆川申上候へ御敵もいた敷多見得申候間是非御かかり被成一合戦被遊可然と申上候間政宗に御相談被成候へ者政宗家中衆敷多昨日片倉小十郎付国府へ参今朝一番合戦に敵大勢打取手負打

死有之只今押付候人数殊之外草臥申候其上最早日も晩方被成候間夜合戦難叶由申候間御懸り不被成候然共皆川是非御一手成共御合戦可然候しからは水野日向其外大和組之衆へ被仰遣明勢被成候て御懸り被成候はば此敵は引色々見得申候間多分御合戦御勝利と存候由達相談申候得共政宗合点無之御合戦如何と申其段を不申上候

七日御立前に主水上総殿御前へ参佐野修理太夫方より状を添て越申候間半人御抱可被下と申上候上総殿爰にて今何とも難成候間無用之由御意有之候へ共再三種々御断申上候是御隙を取時刻移り大坂落城以後御着被成候是又主水不忠之第五也其外種々悪事御坐候事我等存候間主水令迷惑右之喧嘩之相手と名付候て我等打手を向理不尽鬨打可仕とたく之申候由申上

此主水 三九郎と申 公方様御小姓いたし元来利口才覚弁舌明にして一々申ひらく段々事ふかく候間是を略して不記

今日之公事へ勝負わかちかく候處安西申へ主水へ殿中御奉公申上御城案内者其上知人も敷多有之我等儀田

舎者不調法之主殿中之儀も不存候間條々可申上儀も候へ共尾籠之儀御前にて如何と申残候由申上間不苦候間重御聞可被遊候間申上候へと御意にて罷在候

同六月十二日重主水右馬丞於 御前對決右馬之丞申へ今度上総殿四人之家老主水棟梁六千石之加増取候て知行役之侍を私一人もかかえ持不申候上総殿衆足輕大將迄わけわけ四手いたし各々預り軍役を勤申候是知行給候かひ無之御預闔く存候

佐野修理方よりやふせらと申駒を上申候を承先手主水平生所望申上押領仕よき馬に仕立新治源三郎と申者にうり申候清三郎又乗入只今名馬成申候上総殿衆御存知無之候て今度於本國寺にて御覽候て重七枚にめし越後へ御帰之時加賀へ御所望ありて被遣候

上総殿敷年御用を承申候呉服屋所主水大分呉服を取代金相済不申かかり六七百両いたし代金せし申候服を立大文字やと申呉服屋に取かへ此大文字屋金を過分借り前の呉服屋相済申候処かくれ無之由申右之段主水自分之儀にて 公儀之申わけ可仕候處右馬丞又申へ尾籠之儀如何に候得共先年上総殿御前之中居之女房馬廻の堀江土佐と申侍日頃むつまじくいたし御暇申候て妻女に仕候右之女御奉公申候中より懐妊仕候と主水聞出し右之馬廻之侍切腹被申付候て無程又上総介殿御袋之小姓女房お熊と申女主水手をかけ懐妊いたし信濃國の次坂の代官預置申候此段少も偽無御坐候由申上是真にて御坐候間主水閉口いたす 公方様実儀を専被遊候間かやうににんしやく成事御にく之曲事思召候間則主水負に成尾改易被仰付

安西右馬先儀新参者候へ共御主之儀を少成共申わけ可仕候由申上候処寄特に思召候由之上意にて被召出御馬廻被召出越後にて之先知押領仕候

上総殿同七月八日藤岡より江戸之御下屋敷江御出御座候同九日達上聞 將軍様殊之外御立腹被成 権現様御勘道無御免御他界被成一年も立申 將軍様へ御詫言も不被成思召候江へ御越被成候事重々御不屈被思召候間御園上可被成由近藤石見守神尾刑部少為上使被遣翌

日又右之兩人為上使伊勢之朝熊へ御越可被成と被仰付二度目之御上使之時少將様仰分之御誓紙被遊石見守刑部少々為御見被成候辰七月十日申刻江戸御立被成其日品川妙國寺と申寺御泊十一日藤沢御泊十一日小田原御泊爰御法躰被遊それより勢州江御免足近藤石見守御供申々七月廿五日勢州朝熊岳へ御着被成瑞泉院被成御座候御精近被遊候間被成御坐候間近藤石見守此由江戸御老中へ申達候得共左様候はば麓へ下し奉り可然由辰八月五日麓へ御下り被成妙光庵と申寺被成御坐候後日に九鬼長門守に被仰付御番被仰付奉守護之

九月十三日甲州を御國様へ被進為御家老鳥居士佐守朝倉筑後守二万五千石 御附被成候

九月十五日竹千代様お国様へ御人六拾騎ッ御附被成候御書院番衆御花畑衆の中ぬけ人竹千代様へ御附之衆

松平清三郎 中根傳七郎 三枝惣四郎 秋山十右衛門 宮崎金右衛門 酒井五郎助 安藤傳十郎 高田藤五郎 内藤久五郎 門奈傳八 伊達庄兵衛 水野傳藏 小川惣三郎 田村助三郎 牧 太兵衛 戸田教馬 保々長兵衛 菅原左衛門 松平采女 佐野右衛門八 曾我弥五八

稲垣藤七郎 井上清兵衛 鯉江甚右衛門 神尾内記 植村権兵衛 玉虫助大夫 鶴殿新三郎 倉橋三五郎 加藤勘右衛門 永田四郎三郎 中野吉兵衛 土屋左門 戸塚作右衛門 戸田藤五郎 戸田又久 山角藤兵衛 川田助兵衛 大久保右衛門八 渡邊忠四郎 多田所左衛門

御附被成候

松平清三郎 中根傳七郎 三枝惣四郎 秋山十右衛門 宮崎金右衛門 酒井五郎助 安藤傳十郎 高田藤五郎 内藤久五郎 門奈傳八 伊達庄兵衛 水野傳藏 小川惣三郎 田村助三郎 牧 太兵衛 戸田教馬 保々長兵衛 菅原左衛門 松平采女 佐野右衛門八 曾我弥五八

河村善七郎
渡辺吉左衛門
本多四郎兵衛
浅羽孫三郎
成瀬長四郎
御国様へ大番衆より同日御附被成候衆
松平作右衛門
寛十左衛門
細井重大夫
戸田藤右衛門
小林左次兵衛
伊丹弥五右衛門
勝屋勘左衛門
飯河善左衛門
雨宮宇右衛門
高尾勘右衛門
森川善大夫
三枝清右衛門
秋山戸兵衛
富永弥次右衛門
飯塚半次郎
三宅小十郎
大井長右衛門
山上三右衛門
中根五兵衛
逸見市之丞
荏原九郎右衛門
松平傳六郎
大岡求馬助
伊藤源兵衛
飯室与兵衛
小林吉大夫
大田玄九郎
筒井七郎左衛門
右之衆太刀折紙^二御目見仕候

梶川半左衛門
早川五郎兵衛
坪内久太郎
遠山清右衛門
菅沼惣六
本多四郎左衛門^{筆頭}
河野庄右衛門
松下忠兵衛
戸田六兵衛
桜井市右衛門
小笠原与左衛門
朝比奈六左衛門
鈴木権兵衛
米津才兵衛
森川半右衛門
同助右衛門
桑島惣十郎
秋山市左衛門
秋山太郎兵衛
大久保茂左衛門
坂本権十郎
青木八兵衛
関九右衛門
牛込三右衛門
平林勘次郎
高木弥右衛門
駒井清兵衛
加藤五郎左衛門
長塩七右衛門
川井善兵衛
都筑三四郎
朝比奈吉兵衛

一 甲府御城之定番仕候武川衆津金衆七九衆何^度御国附にて今度御国様^江御附被成候

一 今度大坂御陣之砌道具奉行仕候中小野次郎右衛門へ此頃の兵法の名人其誉かくれなし上様へも御指南申上青山伯耆土井大炊何も門成り先年慶長五年信州上田にて真田合戦にも鎗を合武勇諸人ゆるし候間權威たかくして荒言多し或時大坂表之物語を仕候事ありて今度大崩之時相役衆何も混乱すと申候中山勘解由是を聞て其方相役之中^二我等縁者あり扱^二左様之段^二不及聞候誰やらん無心元と返答して伊藤藤新十郎^二此儀を語る新十郎山角神谷石川其外相役衆を集め僉儀して是非とも小野次郎右衛門を相手^二仕対決を可遂と目安を書老中へも申直^二も可令言上由申去年へ御合戦之砌なれば無是非已^二自分過たり又相国様之御意^二餘りに手痛候仕置かな少ゆるやかにもと尊意之通聞召候由^二何^度取合不申候間目安之衆不及是非して上様御成之時分神田橋の程に^二御籠之前^二捧け申然共此趣兼^二違^二上聞けるろ無御取上候間皆手を失して程ありて同月十五日諸大名衆御礼之時於殿中目安を指上これによつて難被指置両方及對決召去御表^二へ不^二被^二仰^二付^二御内所御臺所^二御僉儀也最前^二石川市右衛門と次郎右と争論申互^二無^二證^二抛^二石川へ不^二調^二法^二者^二次^二郎^二右^二利^二口^二者^二へ已^二石川まけなんとす山角又兵衛罷出申互^二無^二證^二抛^二論^二無^二用^二此^二方^二何^度混乱之證抛不可有其方敗北之ありと申しからは證抛を可出由申其時榊原遠江衆皆證人なりと申間則榊原方へ被仰遣今度大坂^二使^二番^二を^二仕^二候^二寺^二嶋^二斧^二之^二丞^二と申者罷出候間御尋被成候得^二誰^二と^二不^二存^二黒^二き^二馬^二に^二の^二り^二猪^二之^二指^二物^二へ^二遠^二江^二備^二之中へ御乗込被成候間何者ぞと申候へ^二御^二旗^二本^二道^二具^二御^二奉行^二衆^二之^二由^二承^二候^二と申上^二是^二則^二次^二郎^二右^二衛^二門^二也^二是^二次^二郎^二右^二衛^二門^二子息又助今度御陣前^二無^二双^二之^二大^二馬^二を^二求^二候^二て^二の^二り^二參^二候^二六^二日^二之^二晚^二へ^二次^二郎^二右^二衛^二門^二此^二馬^二を^二見^二て^二か^二様^二に^二口^二つ^二よ^二く^二心^二をも^二不^二存^二荒^二馬^二に^二の^二り^二候^二へ^二不^二心^二深^二入^二して^二大^二死^二を^二も^二いた^二す^二物也我馬に乗かへ候へと申常^二二^二郎^二右^二衛^二門^二の^二り^二い^二れ^二候^二馬^二とかへ候て彼荒馬^二二^二郎^二右^二衛^二門^二乗^二候^二へ^二如^二案^二口^二つ^二よ^二く^二兩^二度^二か^二け^二いた^二し^二申^二候^二此^二事^二内^二々^二土^二井^二大^二炊^二頭^二に^二語^二り^二申^二候^二間^二土^二井^二大

一 炊頭其申わけを脇より被申候処を山角又兵衛高声^二申^二や^二ふる

一 上様も御坐を御立被成候処^二山^二角^二只^二今^二勝^二負^二つ^二き^二申^二候^二間^二今^二少^二御^二聞^二被^二下^二候^二様^二に^二と^二申^二上

一 此公事双方閉門其中石川市左衛門御改易

一 同八月阿部左馬允松平豊前大番頭被仰付近藤五兵衛門御鉄砲之頭被仰付阿部弥市御歩行頭被仰付

一 駿河大御所様衆駿府より引越被參候はば屋敷なともせはく可有之由^二江^二戸^二川^二を^二北^二東^二へ^二す^二く^二堀^二ま^二わ^二し^二其中をひろげ屋敷割可被仰付由初^二吉^二祥^二寺^二之^二後^二より^二本^二郷の臺をほりぬき可然かと評定候へ共後に^二様^二子^二か^二はり^二て吉祥寺の前を堀通し田安御門の北東之方を引ならし神田明神其外随意^{号新習}以下を先へ送り明神へ神田の臺へ移し御臺所より御建立萬隨意^下谷へ移し本明寺其外小石川方へ移し御堀之土を引ならし屋敷構被仰付

一 大坂より御下向之姫君様本多美濃守惣領本多中務大輔に御縁邊被仰付姫君様御知行十万石御付被下候其時之御上意に本多中務大坂^二最^二初^二高^二名^二仕^二早^二々^二御^二本^二陣^二へ^二持^二參^二彼^二是^二御^二感^二思^二召^二候^二付^二姫^二君^二様^二御^二縁^二邊^二被^二仰^二付^二候^二由^二被^二仰^二下^二寔^二難^二有^二仕合かなと諸人申候

一 坂崎出羽守へ平生不落居人何事も短気にて聊存立事をしらへかたき躰の人也此折節如何天魔其性にやいりけん姫君様之御事を承候て大^二立^二腹^二して^二申^二候^二者^二抑^二今^二度^二大^二坂^二表^二最^二前^二高^二名^二仕^二兩^二上^二様^二之^二御^二前^二へ^二參^二懸^二御^二目^二候^二へ^二我^二等^二一^二番^二也本多中務などは遙か其後之事も御前^二何^二公^二之^二者^二ともうろたへ候て取違御耳^二立^二候^二か^二最^二初^二之^二高^二名^二を^二御^二賞^二罷^二と^二て^二十^二万^二石^二之^二御^二加^二増^二其^二上^二姫^二君^二様^二御^二縁^二邊^二被^二仰^二候^二と^二の^二御^二事^二へ^二我^二等より外^二有^二間^二敷^二候^二間^二本^二多^二中^二務^二と^二武^二邊^二公^二事^二仕^二候^二て^二對^二決^二之上^二御^二加^二増^二を^二申^二請^二姫^二君^二様^二とも^二可^二申^二請^二骨^二張^二仕^二若^二其^二前^二御^二興^二入^二申^二候^二は^二ば^二御^二興^二す^二かり^二可^二申^二と^二云^二聞^二人^二皆^二肝^二を^二け^二し^二是^二は^二如何にと申此頃已^二桑^二名^二へ^二御^二興^二可^二被^二入^二御^二用^二意^二有^二之^二之^二処^二何^二者^二か^二風^二説^二に^二申^二出^二し^二候^二を^二坂^二崎^二出^二羽^二守^二御^二興^二可^二奉^二取^二用^二意^二と^二風^二聞^二之^二間^二御^二旗^二本^二之^二若^二侍^二共^二未^二何^二と^二も^二不^二仰^二出^二候^二へ^二共^二出^二羽^二守^二罷^二出^二候^二は^二ば^二討^二取^二候^二は^二ば^二高^二名^二に^二も^二罷^二成^二可^二申^二か^二と^二忍^二ひ^二忍^二ひ^二に^二出^二羽

守屋敷之近所へ詰寄日夜集事不知數

此坂崎屋敷柳原にて向者松浦法印左へ前田能登右へ加藤

左衛門宅也出羽守も何となく四方ひそめきける間門をと

ち人の出入をやめ弓鉄炮を構へ置鎗のさやを取候て切く

屋の上へあかり四方を見せ用心隙もなしかくて数日をおく

ら者雜説様々にて強敷事如何との儀^ニ柳生但馬守^ニ被

仰付委細夜柳生則出羽守方へ參是^ハ日比出羽守と但馬

無他事知老也是により出羽をすかし何とそたるめ押籠

可申とのために參候へ共出羽守土藏^ニ引籠候て但馬にも

不對面候間出羽守家老牧野勘兵衛と申者を呼出候て但

馬申者出羽守乱奉と見申候間切腹いたさせ舍弟大膳

^ニ跡を被下候間各々如毎々家中の仕置等可仕則石州へも

但馬守方よりも使を添可申遣由申渡す家老共何も大膳

^ニ御知行被仰付候儀難有仕合之由申其後但馬掃候て後

出羽守土藏より出行水仕之処^ニ人を残し置及生害于時

九月廿九日也寔^ニ此出羽致乱奉五十に餘り候て御若年の

姫君様御縁邊を望ふつ合の仕合諸人の嘲に罷成事前

代未聞也其後舍弟大膳^ニ石州津和野可被下かと一年

案堵之躰^ニ罷出候処^ニ柳生但馬駒井右京進為御上使石

州へ令下向大膳に^ハ家財を被下し京都へ送り家来皆以方々

へ御預被成家老牧野勘兵衛^ニ土井大炊頭抱置申候

石州津和野へ龜井豊前守^ニ被下候

同十二日尾張殿御国より始^ニ御下向當年四月迄駿府^ニ

御坐御他界以後御国へ御上り只今御下向御屋敷無之

候間本多美濃守宅を御借御座

駿河中將殿も未御屋敷御請取不被成候間しはらく御在江

戸之間西の丸下小笠原右近屋敷御借御座

喧嘩口論之時一切至其場不可出合事

咎人加成就之刻申付者之外至其断不可懸合事

町中火事之節^者下々共一人も不可出合但於為奉公

人之断も其親子兄弟縁類者不苦候其外縦與為知盡

一團不可懸付事

右条々堅相定記於有違背之族^者可敷敵科者也

元和二年九月廿九日

此翌日坂崎出羽守被誅候也

條々

駿河守諸職為相統申付上者出羽守駿河守如仕置可致沙汰

家中縁邊之事二千石以上^者可得 上意二千石以下不及沙

汰但奥為小身依其に令言上可申付事

公事批判之儀駿河如時代可申付奥然相談之上於有不能分

別儀^者可言上事

出羽駿河申付候諸奉行役人等為私不可改替若又於闕所可

得上意事

出羽守駿河守勘當之者至領内從最前不立入等当代亦不可許

容事

知行加増之事^并新參之者相抱事源五郎幼少之間^者得

上意可隨其上事

企徒黨不可申合事

以上

元和三年五月九日

最上源五郎とのへ

元和三年^{丁卯}

正月朔日^{丁卯}風吹御礼御流如件

二日公方様御不例^ニ無御出御詔初御延引

同十一日御氣分御快氣御詔初

二月十二日大久保甚左衛門田中城代被仰付同心^茂則召

連可罷上由被仰付

二月十三日申刻大風吹世間黒闇入洛中も江戸中^茂家と

も吹倒

二月廿一日久能之御廟^江救諭使号

東照大権現

同月所替被 仰付

松平安房守^{先^ハ四月廿四日也} 土浦^ノ

松平大隅守^{先^ハ四月廿四日也} 高崎^江

池田備中守^{備中^ハ山江}

山崎甲斐守^{備中^ハ山江}

本多美濃守^{先^ハ三月廿七日也} 自松

羽州より申来最上駿河守於国能^テ見物いたしながら三

十六にて頓死候付^ニ死様不思議と家中^ノ疑あり後日^ニ

公事と成子源五郎^ニ跡被仰付

二月五日大久保相模守子共河越^江御預候処又改大久保右

京南部^江御預同主膳津輕^江御預

同日井上主計頭為老中

三月十五日 東照権現様久能^ノ下野日光^江御移^リ御供

御先^ハ南光坊僧正

本多上総介 土井大炊頭 松平右衛門大夫

板倉内膳正 秋元但馬守 成瀬隼人佐

安藤帯刀 中山備中守 永井右近大夫

榊原内記等也

十六日三嶋迄御出一日御滞留十八日小田原^江御移^リ一日

御滞留廿日中原之御殿是^ノ中通武州府中^江御座夫^ノ河

越の仙波^ニ御滞留仙波^ノ忍四月朔日忍より佐野の春日山^ニ

御座四月四日に日光^江入御

京都女院之御所御普請有奉行^ハ五味金右衛門

三月十七日増上寺^江 上様御成路次にて大橋長左衛門御目

安を捧則後日被召出御右筆仕^ル

三月十八日阿部左馬允松平内膳正大番頭被 仰付 永井善

左衛門御鎗奉行被仰付

江戸御城中紅葉山^ニ権現様御宮御建立被成 山王権現

日光権現 東照権現 三社一宮奉崇任清と申者を御

宮^江御附置被成候

四月十日大雨降大出水^ル

同十一日大風雨近手無比類

十二日天晴といへとも北風吹将軍様日光^江御參詣

十三日大風吹入間川の水出候^ニ小手小塚原之大橋もうき

なかるる計りに見へ申候御渡^リの時分^者小石を俵^ニ入ひ

しと置候^ニ無子細御渡^リ被成候御跡に^ニ水増御供之衆

牧野織部以下十二三騎水^ニなかされはふはふあがり其中死

する人馬一兩人有昨日十一日御先へ参り候下々道具など

持申候者之類千手^ノ草賀村之間にて大風に咽て死する

者十三人有かやうの天変前代未聞のよし諸人申候

十三日岩附 御着被成栗橋の船橋大水^ニなかれ候間一日

御逗留あり

同十六日 上様日光江入御

同日 御神祇御正殿御移

公方様御参詣諸大名悉致参詣

勅使中御門 直衛 清閑寺 共房 阿野 實頼

院使西洞院 寺相時直

女院使平松 待從

黒田筑前守国本 二 石之鳥居を令造立日光江奉寄進諸

大名石塔籠を奉寄進

同十三日 公方様日光御立

日光御遷宮相濟為御祝儀五月六日御能被仰付在江戸之

諸大名登城

五月十三日加賀筑前守宅 江 公方様御成筑前守被下御太刀

守家 御腰物 一文字 御脇指 平野藤四郎 御帷子御単物御拾

百 八丈 三三編 銀子 三千枚

御能七番有之

筑前守献上御太刀 守家 御刀 貞宗 御腰物 新身藤四郎 御馬一疋

置鞍 袷小袖 百 白糸紅糸 百斤 綿 一千把 襦珍殿子 五十巻 黄

金 三百枚 筑前守進上

筑前守家老共銀子単物御太刀 二 御目見各

卯月十七日御遷宮同十八日堂供養御着座

卯月廿一日江戸江還御

六月就御上洛路次中御供衆之宿割小沢瀬兵衛山岡五郎等

被 仰付発足

卯月廿二日日光普請奉行本多藤四郎於壬生切腹被仰付

去年日光御宮之御普請被仰付當春大形出来御普請奉行

本多藤四郎山城宮内少輔槽屋新三郎惣奉行日根野

織部正や此内槽屋者去年秋散々相煩江戸江罷帰無程相

果其後御普請當春出来御掃除勘定之儀いそぎ度よ

し宮内申候處本多大酒 二 織部も上戸兩人毎度寄合長

酒 二 面 はたし不申候間宮内切々其席へ来候催申候付

本多醉狂腹立刀のこじりにて宮内こびんをつき申候間

宮内か様之神宮之奉行被仰付候へ何と有之候とも喧

嘩には仕間敷由申御掃除勘定有増いたし御代官松下孫

十郎清帳調相渡宇都宮江罷出終一切腹仕候其後色々

御穿驚候得とも終以藤四郎切腹被 仰付候

上総殿伊勢之朝熊御座候付九鬼長門守被 仰付同

五月十三日より朝熊在番仕候

上総殿御前政宗息女 二 御坐候付則政宗御預被成候

御前御腹御子なし御袋様附居申候お竹とのと申上藤

の御腹上総殿御子御坐候徳松殿と申候是者お竹とのと

もに岩附江御預被成候御家中衆者九万石村上周防六万

石溝口伯耆二万六千石花井主水二万六千石松平大隅守二

万六千石山田隼人老万六千石松平筑後二万石松平出羽

右之衆御上使阿部四郎五郎御城請取御越候松平伊与

殿堀丹後守佐久間備前守江無相違御城相渡罷立候處松

平築後山田隼人屋敷刑部屋敷等は城中有之付三人

申候御城をこそ御上使相渡可申候得共屋敷少将殿

御下知無御座候者明申事仕間敷候典事思召候者切腹

可仕由申切候間御上使此通りを江戸江申達候へ朝熊江

以飛脚自老中被仰通從上総殿無相違相渡可申由申

来候間筑後隼人刑部御城中より罷出申候

四年

四月九日越後本城丹後押領松平伊豫守同高田押領酒

井宮内高田押領あやまり

三年五月九日最上源五郎駿河跡被下被仰出

六月二日 公方様御上洛 六月十一日 神奈川御泊江戸御

発足同廿九日伏見へ御着 廿九日

十三日 藤沢

十四日 小田原

十五日 三嶋

十六日 蒲原

十七日 於志水昼御膳久野御参同日駿府着御

十八日 御滞留

十九日 田中御着

七月廿一日御参内 直二伏見ヨリ御参内同晚二伏見江還御

七月朔日江戸内藤若狭守死去七月廿一日酒井河

内守死去

本多三弥 正重 七月三日七十三 二 面 死

京都 二 面 六月廿一日尾参内右兵衛督殿駿河中將殿中納

言御補任

六月廿一日福嶋左衛門大夫嶋津大隅守補任宰相藤堂和

泉守補任侍從其外諸大夫十一人伊達政宗越前少将殿

補任宰相

八月朔日朝鮮人來朝是者大坂御陣大平之御祝義の

ために三使を進上使者通政大夫 吳厄通訓大夫朴 木へんに幸

通訓大夫季景 稷又 朴崔 両通事上下四百余任也紫

野大徳寺に着天瑞寺惣見院旅宿此時旅宿之門外

而武官の唐人から鉄炮二ツ打文官之唐人管弦をいたし

扱宿に着申候由御馳走之奉行板倉伊賀守也

同二日本多上野介板倉伊賀守為上使大徳寺江参是

遠路太儀之上意也三使庭出向て立て礼有之童形

之小唐人人参を茶之如く煎し天目入臺すへて

御上使之前江持来

八月三日宗對馬守柳川豊前守進物を披露申

同六日唐人伏見江参御礼申上巳上刻二西之丸南面之

御上檀御量をかさね上御蒲團其上御鋪を敷御左

之方御刀懸あり御衣冠御座進物上東南之御縁之

上置昵懇之公家衆諸大名着装束出仕す 板倉伊賀

守本多上野介土井大炊頭安藤對馬守御縁同公三使

御前江出る大沢少将捧書簡三使近上檀之闕て三拜仕

退て西向て座す両通事縁より量へ上り三拜す官人

等縁之上三拜す各退く下官等庭中にて三拜

して退く後に御近習衆立て上檀之御簾を垂れ下段之御簾

をたる扱式三敷之御振舞あり御近習の諸大夫致給仕板

倉周防守永井信濃守本多上野介安藤對馬守御前之宮

仕通事御家老衆へ向て三使忝奉存候由言上す 公方様

入御三使へ者七五三通事以下常之御振舞未刻唐人

退出申候其後 公方様御出座尾張中納言殿駿河中納言

殿米沢中納言越前宰相 忠直 大崎宰相 政宗 以下参る

大名衆御對面也松平右衛門大夫伊丹喜之助被仰付赤

飯御菓子酒肴を持参いたし唐使大佛殿 二 面 昼休仕候

處へ参御馳走被下候三使何 忝由申上 八月廿六日院御所様崩御御年四十七奉諡後陽成院東山泉

浦寺^二御葬礼此上皇^一后之中和門院^{近今ノ天子ノ御母}と御中
惡敷候^二后より駿河御所へ讒言被成候間東照權現と御中
惡鋪候^二以の外の御事あり内裏之御領所老万石院之
御領式千石や王子敷多^二殊更御無力不及是非候處
南光坊取持候^二大御所と御中直し被申日^一閑東^ノ
少々御合力御座候^二付叡感之餘り南光坊准門跡之位
を被下右之御葬礼御中陰^一盤舟院^二有之以下之儀式
事長く候間略之

一
九月五日朝鮮人御暇被下上野伊賀兩人為御使大徳寺^江參
御返翰^并銀子一万五千兩金屏風十五雙被下三使には一人^二
五千兩金屏風五双充也通事^二銀子四千兩上官式人^{銀千}
五兩^諸諸官人^十同十日大徳寺を立淀へ赴き上官迄^者何
飛行儀作法よし其以下^者無作法にて恥をも不知慈悲も
なく馳走のためにぶた鶏を方々より旅宿^江よせ候^一者鶏を
生ながら桶に入蓋をして小き穴をあけにへ湯を入候得
中にて鶏殊之外狂死候^一者取出し候間不殘落申候是
を一入賞訖仕候むこきと申事を不存候

朝鮮國王季渾奉書

日本國王 殿下

此間廷臣啓●屢聞對馬嶋主義成

柳川調与傳致

貴國勤●之重要請敵邦信使而為緣事非常例末敢輕議
今者

貴國平定大坂統合日域豈非彼此生靈之福哉況今日修好敦
睦茲遣使价為報懇懇將此曲折已奏天朝只願貴國益嗣
好音

母原信儀不勝幸甚不腆土宜付在別幅統希盛諒不宜

万曆四十五年五月日

朝鮮國王季李 渾

日本國源 秀忠 奉復

朝鮮國王殿下

先回通信之後●隔十有餘之星霜恰似忘宿計茲官使三員齋
宝●未發緘則春々之芳意益見于辞殊異産多般不勘佩柳大
坂之●徒妄企姦謀欲覆國家越不日●義兵誅戮之易於湯雪

脆於枯敗北之餘類靡有●遺忽聞于
貴國●彼此生靈之福非啻賞一朝●重城之良策況又復往年
却
貴國之冤讎者乎事已見奏

天朝實彼此之大幸成遐迩親睦上下咸淳厚莫若此日三使所見
聞也不渝旧盟弥修隣好而自今可至千万世祝々莫須時自
重

龍集丁巳秋九月日

日本國源 秀忠

一
九月六日今度唐人進上申候高麗鷹於伏見大名衆へ被
下候

一
九月廿七日 公方様還御

一
十月十一日之間替星と●氣出^{九月十八日ヨリ伏見御立二条二御入}

一
今度御上洛之道中之宿割參候山岡五郎作小沢瀨兵

一
衛御改易被仰付

一
土岐山城守撰州高槻城被仰付都合式万石^{老万石}

一
十一月廿一日若君様西丸^江御移徒^{御加増}

一
同廿三日御祝儀之御能

一
諸大名より御太刀御樽肴上

一
十二月村上周防家中^二不思議之公事あり周防守家老之

一
高野勝左衛門と申者を何者の仕候とも不知江戸の周防

一
守長屋^二關打^一うたれ申候勝左衛門か子權兵衛周防

一
守^二申色々穿鑿仕候得共しかとしれ不申候爰^一周防

一
守問^二兼松与三郎と申者あり是^一去々年切腹仕候富田

一
次郎左衛門と申者の孫にて御坐候勝左衛門^二意趣有之候

一
間多分是の打申候と權兵衛存候^一とも證拠も無御坐候處

一
勝左衛門うたれ申候時近所^二伏申候女をとらへて糺明して

一
周防守問之其頃江戸^二居申候侍共を一々かの女に見せ候^一者

一
兼松与三郎を是^二御坐候と申候間則与三郎を成敗妻子

一
母妹など村上^二居申候を權兵衛申請於村上はた物^一かけ

一
申候

一
十二月八日伊達正宗子息美作守忠宗^江御城より御輿入御

一
駕に被仰付是^一先年

一
權現様之御駕に御契約被成おかし殿御腹の御息女様を可

被遣由被仰付候處に其御息女様無程御果被成候間殘念^二
思召 權現様御孫池田三左衛門殿御息女をおかし殿養子
被成今度被仰付土井大炊頭渡邊山城守步行にて御輿之
後^二付虎之御門之外^一御輿を被渡政宗方^一家老二人出
向^一伊達阿波守 御輿を頂き三押して請取申作法無殘
所大番之組頭丸毛兵左衛門と申者御加増被下御前之御守^二
被遣

一
佐渡御代官米倉助右衛門死去之間大番之組頭鎮目市左
衛門を御代官^二被仰付

一
十二月廿五日諸大夫被仰付

一
松平出雲守^{元忠左衛門}

一
内藤修理亮^{元万次郎}

一
三宅越後守^{元豊兵衛}

一
朝倉筑後守^{元龍十郎}

一
去七月相果申候本多三弥儀子息平四郎廿年以前^二

一
早世いたし別^二子無御坐候間平四郎孫を三弥養子^一

一
仕置跡目^二申立候然共同名上野何様之遠慮御坐候越御

一
知行半分差上候^一前半分被仰付候様にと申上候^二付老

一
万石之内五千石被下候

一
条々^{是者四月初日日光御成之時御法度書}

一
今度御供之時脇道す^一からず^二井於町通家際左右を

一
際神妙^二可有供奉事

一
御泊^江御着座之時馬より下り馬^一其所に置御供衆

一
を通し其次^二馬を通し其後諸道具を可通事

一
附御座所へ御供之事当番衆之外可為無用若

一
此旨於背^二為過料銀老杖可出

一
自然如何様之儀出来候共番頭之下知なくして其身の

一
事^一勿論下人等^二至迄不可出之事

一
馬上際に召れ候步行者之^一馬取式人杏持老人草履取

一
一人持鎗老本此外若黨を召れ^一へき事

一
騎馬之申^一乘替之馬引入^一からず若相交ものあらは

一
銀子老杖可出之但有御用御召之人之馬^一可為格別事

一
御供之時馬口とらする●^一并馬に声かくるにおみて^一銀

一
子老杖可出候事

御目付之面々^ニ諸奉行過料可出●仕輩を見のかし聞のかし於今用捨^ハ銀子一枚右之輩可出事

諸道具入込に参ましき事
御泊^江御着座之時於町中笠頭巾を可取事
町通^ニおゐて馬口洗へからず^并馬に声かくへからさる事
何^及組頭無之分者同奉行を定御前可相詰事
元和三年卯月十三日

元和四年^{戊午}
正月朔日御礼如例巳刻以後大風日暮^ニ止
二日御誦初如例

七日御鉄炮初御鷹野初葛西筋御成
二月三日小杵筋御鷹野同日黒田筑前守御城中紅葉
山御宮へ石の鳥居一基奉寄進

尾張殿紀伊殿水戸殿御三人^江御城中^ニ御屋鋪被進
各御普請有之

大御所様御他界之時分食傷^ニ御坐候之間万病円
御用被成度由御意被成候^ニ付^而片山与庵申上候^者御脉
昧悪御坐候之間万病円^ハ必御無用之由達^而言上申候間御
用不被成御氣分重り候^而扱々はやく万病円御用候^者可や
らに重り^者被成間鋪に奉留處重罪之由御立腹被成

信州^江配流被成然共今度被召返御免許也
三月六日村上周防守家来魚住角兵衛と申者越後村上^ニ
開打^ニうたれ申候様子を穿鑿仕候處^ニ家老高
野権兵衛所行^者諸人申候間彼角兵衛か弟和右衛門と
申者江^江参周防守^ニ申候^而なけき候間無據事^ニ成
候^而公事に仕候高野権兵衛^ハ上様御存之者^ニ候得^者
家来^ニも内證にて申付候事不罷成奉行所へ出し
對決仕候内々之吟味^ニ大方高野権兵衛所行之昧^ニ
候へとも寢と證據も無之其上高野不大形才覚かう
さなる人にて殊^ニ言語分明之理屈者なりければ
終に高野権兵衛勝に罷成候

前之村上周防守子なくして娘の孫を取立候^而跡を令繼
候是^ハ慶長五年^ニ打死仕候戸田武蔵守か子や然とも^ニ
三才^ノ外祖父合養子候間御免許被成立た^カせられ

候處に度々家中^ニ申事あり無仕置之段曲事に思召則^四九月九日周防守御改易^ニ成丹波之笹山^江配流則
越後村上^者堀丹後守拜領

高野権兵衛先祖^ニ高野藤蔵と申人昔尾州熱田にて
大御所様十歳之御時小鳥を進上申候を思召被出
大御所様の御代高野勝左衛門御目見呉服拜領仕候事
当公方様御存知之間後^ニ高野権兵衛被召出候

四月上総殿朝熊御座候付^而為上使近藤石見中山勘解由
朝熊へ被遣飛驒^江御越可被成由被仰付候處^ニ上総殿重き
御答^ニ飛州^江被遣候も飛州迄も参ましく候間爰元
ともかくも上意次第に可罷成候間飛驒^江御越被成間敷^由
由被仰候間御上使此趣江^江申通し候へ^者自御老
中先今度^ハ上意次第に飛驒^江御越御尤之由御異見被申
上候間朝熊より飛驒^江御遷り被成候道中^者近藤石見
中山勘解由九鬼長門守御供申上総殿御家来衆^ハ榎木
左京千本掃部久世左近藤藤十郎左衛門戸田采女

戸田覚弥富永九兵衛但此兩人^ハ朝熊^ニ御暇被下候へ
とも飛州まで御供仕上使^者一同^ニ罷帰候
同四月十七日於日光御神事御祭礼有本多上野介為
御名代参詣

同月勢州国府之内平野村^ニ奥^ノ官^ニ上^ニ座頭四人
殺申候間御せんさくに金三十枚此処^ニ懸らる
国替之条々爰に有四月九日也

同七月関長門守家中にも公事御坐候^而長門守知行五
万石被召上^而伯耆国^ニ伯耆国^ニ去是^者知行五千石息兵部被下
候長門夷子なく弟主馬子を養子^ニ仕是を関兵部と
申候

八月松平元齋京^ニ死去是^ハ参州長沢の松平之惣領上野
介子也上野介^ハ清康様御妹婿^ニ元齋^ハ御甥也上野今川
義元討死之時一方之大將にて討死仕候間其後家酒井左衛
門尉為妻元齋^者又^ニ権現様御妹を被下岡崎三郎様御
家老^ニ被附候處^ニ三郎様御仕合之時蒙御勸氣兄弟浪人
仕其後関東御入国之時元齋内儀矢田殿^ハ
権現様御妹^ニ御座候付元齋子息源七於深谷老万石拜領
仕何^及長沢衆源七^ニ附申候處^ニ源七致早世跡絶候間上総

殿御幼少之時源七跡御相続被成候間長沢衆出羽筑後何
も上総殿^江参申候元齋^者一腹之舎弟本多縫殿得扶助
京都誓願寺邊^ニ罷出令長命八十五歳之由

十月廿九日 公方様越谷^江御鷹野それ^ハ東金^江御成数
日御逗留内藤左馬助御加増五千石被下候左馬助佐貫
罷在候間其近所^ニ被下候

十一月十一日江^江還御
十一月廿三日夜海中鳴動する事半時計也
十一月廿六日板橋之原へ御鹿狩出御鹿三十一頭留御機
嫌の還御

十二月六日堀美作守御加増五千石拜領^之美濃
本多備前守 老万石拜領^{上州国并}
酒井讚岐守 老万石拜領^{武州深谷}
いきりす船於長崎平戸可令商賈之旨至諸濤被仰出
候其外密々に商賈不可然由去八月松浦肥前守長谷
川左兵衛方^江五奉行人より被遣候

下々諸奉公人年季者格別一季と二月八月一年^ニ兩
度出替申候事でわしきやうに候間近頃より二月二日
に出替定候是^ハ在々^ニ二月耕作の用意申に付^而三月
はもはや耕作の用意おそなわり申候間二月^ニ極相濟
不申候へ^者三月^ハ引込耕作仕付可申ためと被
仰出然るに下々奉公人共数多令浪人在郷へ参もいや
奉公も六ヶ鋪存引込則山●等の弟子となり祈祷も
卜筮も不存伊勢之祭文一ツ愛宕之祭文一ツいつれなり
とも習候^而勸進いたし身命をすき或又伊勢熊野
の勸進比丘尼を妻女に持弟子を置彼等^ニ勸進いたさせ
扱無程峯へ入先達と号金蘭之袈裟をかけ院号を
付諸人^ニ慮外を仕仍の外之曲事之由被 仰出依之下
々之中間もすくなく候間御法度^ニ被 仰出
急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

殿御幼少之時源七跡御相続被成候間長沢衆出羽筑後何
も上総殿^江参申候元齋^者一腹之舎弟本多縫殿得扶助
京都誓願寺邊^ニ罷出令長命八十五歳之由

十月廿九日 公方様越谷^江御鷹野それ^ハ東金^江御成数
日御逗留内藤左馬助御加増五千石被下候左馬助佐貫
罷在候間其近所^ニ被下候

十一月十一日江^江還御
十一月廿三日夜海中鳴動する事半時計也
十一月廿六日板橋之原へ御鹿狩出御鹿三十一頭留御機
嫌の還御

十二月六日堀美作守御加増五千石拜領^之美濃
本多備前守 老万石拜領^{上州国并}
酒井讚岐守 老万石拜領^{武州深谷}
いきりす船於長崎平戸可令商賈之旨至諸濤被仰出
候其外密々に商賈不可然由去八月松浦肥前守長谷
川左兵衛方^江五奉行人より被遣候

下々諸奉公人年季者格別一季と二月八月一年^ニ兩
度出替申候事でわしきやうに候間近頃より二月二日
に出替定候是^ハ在々^ニ二月耕作の用意申に付^而三月
はもはや耕作の用意おそなわり申候間二月^ニ極相濟
不申候へ^者三月^ハ引込耕作仕付可申ためと被
仰出然るに下々奉公人共数多令浪人在郷へ参もいや
奉公も六ヶ鋪存引込則山●等の弟子となり祈祷も
卜筮も不存伊勢之祭文一ツ愛宕之祭文一ツいつれなり
とも習候^而勸進いたし身命をすき或又伊勢熊野
の勸進比丘尼を妻女に持弟子を置彼等^ニ勸進いたさせ
扱無程峯へ入先達と号金蘭之袈裟をかけ院号を
付諸人^ニ慮外を仕仍の外之曲事之由被 仰出依之下
々之中間もすくなく候間御法度^ニ被 仰出
急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

急度申入候愛宕勸進真似山伏多候之間寺家衆へ被
仰渡真似山伏無之様 尤存候恐々謹言
猶以愛宕山伏以御札勸進仕候無坊様 尤之其外
於此地改可申候伊勢^江も右之通申越候已上
元和四年正月廿九日 安藤對馬守

土井大炊頭

本多上野介
酒井雅樂頭

同時伊勢江茂被仰遣勢州之政所水谷九左衛門也

急度申入候仍御伊勢殿と申神号借真似勸進之者
数多下国候然共山田之神官又香寺院被申渡不謂
真似勸進のもの退将候様 被申觸候也恐々謹言

元和四年正月廿日

安藤對馬守
土井大炊頭
本多上野介
酒井雅樂頭

水谷九左衛門殿

元和五年

三月

此月酒井宮内大輔賜信州松代松平伊豫守忠昌賜越

州高田松平安房守賜丹州篠山本高松平大隅守賜

遠州橫須賀二万六千石高力左近賜同国濱松三万石

五月

八日 御上洛御留守御本丸二番御国様西丸二八大納言様大名

二番鳥居左京内藤左馬福嶋左衛門大夫酒井宮内大夫

松平下野守最上源五郎

七月

十三日

板倉伊賀守御免同周防守京都御守護

於江戸御留守伊丹源六悪事歇從京都召下於箱根召

捕

八月

朔日

九州稚葉山之一揆那須彈正催逆儀之間大久保四郎左衛

門阿部四郎五郎下向九州於江代一揆之棟梁百四拾

余人誅罰

十日

此月福嶋左衛門大夫依有罪科安藝備後兩國被召上於津
輕表四万五千石被下旨後信州須坂被下為上使在江戶以牧野駿河守花
房志摩守被仰遣大名衆江之上使久世三四郎坂部
三十郎也

安藝廣嶋江上使安藤對馬守永井左近大夫城請取在番共二

本多美濃守酒井宮内大夫本多縫殿介同請取松平宮内少輔

松平阿波守森美作守生駒讀岐守堀尾山城守加藤左馬頭松

平長門守松平土佐守三原之城請取池田備中守山崎甲斐守

相越

此月從当年伏見之御番衆大坂之御城江參御番仕候御普

請いまた出来不申多門にて御番相勤申候当年之御番

衆松平石見守松平豊前守

九月

十日

伏見江掃參

宰相中将殿親賜紀伊国御加増五万石浅野但馬守賜

安藝及備後之内

嶋田清左衛門久貝忠左衛門各大坂町奉行被 仰付

服部權大夫同李今切之御番被仰付

京知恩院御建立被 仰付奉行者川勝信濃五味金右衛門

宮城丹後

廿日

還御

廿七日

加藤肥後守家來加藤右馬允加藤美作之公事於雅樂頭

亭對決美作負同預追放或切腹

十月

十三日

日光江御発駕十六日日光江御着十七日御參宮十八日日

光江御発駕

廿日

永井右近賜笠間小笠原左衛門賜閑宿式万二千石酒井

備後守御加増武州奥平千福賜古河安藤對馬守賜高

崎五万六千石青山伯耆守賜岩付城五万石酒井雅樂頭

御加増上州石今度還御之節駿府

那須衆千本民部福原淡路被 仰付

都宮城佐野城也合拾五万石八分

一年古田大膳大夫重治賜石州濱田城五万四千石同九年

甥兵部少輔重恒三讓松平下総守清臣賜和州郡山城十二万

石從大坂移於此内二万石加増水野日向守勝成賜備後福山

城拾万石内四万石加増依 台命新築松平周防守康

重賜泉州岸和田城五万石後檢地高合六万石松平紀伊

守家信賜撰州高槻城二万石

此書者酒井雅樂頭所持
越中守江差出之事實慶長
年録二異事無之二付而慶長
年録二闕候所計写置者也
寛政二戊年

元和六年庚申正月

元三之規式如例

二日御謠初

五日御茶湯初御鉄炮初

六日出家山伏社人御礼

十日葛西筋御鷹野

十八日大坂御城之御普請被仰付西国北国大名衆奉惣

石垣内曲輪迄築之

大名衆請取之分

青や口御門より玉造御門迄之間

越前宰相

一柳監物

松平土佐守

玉作御門より大手御門迄之間

嶋津

織田刑部大夫

古田兵部少輔

稻葉民部

松平筑前守

京極若狭守

京極丹後守

石川主殿頭

堀尾山城守

鍋島信濃守

有馬玄蕃頭

京極若狭守

秋月長門守

来島右衛門市

木下左衛門大夫

本多因幡守

分部左京進	遠藤但馬守	生駒老岐守	藤堂和泉守	中川内膳正	伊達遠江守	京極修理	京極采女正	一番	御長持	百六十枝
嶋津右馬頭	戸川土佐守	山崎甲斐守	一柳監物	伊藤修理大夫	片桐出雲守	加藤左馬助	松倉豊後守	二番	御行箸	十荷
伊達遠江守	松平阿波守	桑山左衛門佐	桑山加賀守	徳永左馬助	織田河内守	小出大和守	小出信濃守	三番	御屏風	三十双
池田備中守	森美作守	有馬藏人	松平石見守	加藤五郎八	桑山加賀守	京極若狭守	藤堂和泉守	四番	御野簾箱	老對
松平右京大夫	松平右近大夫	松平宮内少輔	京極丹後守	正月廿日御具足之祝御連歌有				五番	御木丁	式ッ
京極修理	中川内膳正	平岡石見守	松平新太郎	世にかさ須天津らとりや松之春				六番	御まく箱	老對
立花飛騨守	立花主膳正	稲葉淡路守	毛利伊勢守	霞にあまる四方の毒かか				七番	御衣行箱	三ッ
松平右衛門佐	松浦肥前守	大村松千代	寺沢志摩守	長閑にも千鳥百鳥声はして				八番	御長かもし箱	老ッ
松平右衛門佐	松平長門守	堀尾山城守	石川主殿頭	日野大納言 寶勝				九番	御ほかひ	十荷
秋原伯耆守	松平長門守	堀尾山城守	片桐出雲守					十番	御小行箸	五荷
松倉豊後守	加藤出羽守	小出對馬守	片桐出雲守					十一番	御膳行箸	式荷
伊藤修理大夫	土方丹後守			三月七日武州浦和大宮筋御成あられ降候鳥獸數多死				十二番	御弁当	五荷
大手御門より京橋迄之間				同日京又大火事有				十三番	御つつら	拾荷
加藤肥後守	黒田右衛門佐	有馬左衛門佐	加藤左近大夫	同日最上源五郎家中申ふん有之 ^二 付 ^一 而 ^二 両方之様子御聞				十四番	御挾箱	式荷
秋月長門守	田中筑後守	有馬玄蕃頭	寺沢志摩守	可被成ため今村傳四郎石丸六兵衛為御上使羽州江被遣				十五番	御荷	式拾荷
土方丹後守	加藤左馬助	松浦肥前守	大村松千代	同日牧野右馬允御加増老万石致拝領 ^{越後国} 是 ^者 去年				十六番	御長持	百枝
来嶋右衛門市	木下右衛門大夫	細中越中守	森美作守	福嶋方江御使に被遣候處御使之様子首尾仕候間如此				十七番	御箏	三十
本多因幡守	松平伯耆守	片桐出雲守	藤堂和泉守	四月十五日大番頭水野備後守 ^{改葬正} 水戸殿江御附子備後守				十八番	廿一代集箱	一ッ
京橋口より青や口迄之間				御知行三州 ^{新城} 老万石以下				十九番	御双紙棚	一ッ
松平宮内少輔	松平新太郎	毛利伊勢守	生駒老岐守	四月十七日日光山御祝事本多上野介為御名代参詣初 ^而				廿一番	御黒棚	一對
松平筑前守	越前宰相			御旅所江神幸××上野介神幸御供之道具奉寄進				廿二番	御之つし棚	老對
内曲輪東分				四月廿四日酒井讃岐守若君様江御附被成				廿三番	御貝桶	式荷
京極若狭守	堀尾山城守	石川主殿頭	市橋下総守	四月廿三日加賀筑前守肥前守 ^ニ 改補任是 ^ハ 子息犬千				廿四番	呉服箱	三荷
松平長門守	松平阿波守	鍋嶋信濃守	織田刑部大夫	代筑前守と可申上ため之由				廿五番	御からひつ	三ッ
立花飛騨守	立花主膳正	本多因幡守	分部左京進	同廿六日加賀肥前守上野之屋敷へ 將軍様御成肥前				廿六番	御装束箱からひつ	老對
有馬左衛門佐	遠藤但馬守	稲葉彦六郎	松平右衛門佐	守 ^ニ 被下候御太刀 ^{二字} 御腰物 ^{秋田} 御夜衣 ^其 羅紗				廿七番	御ふくからひつ	老對
古田兵部少輔	島津右馬頭	秋月長門守	森美作守	御袷 ^{二百} 銀子 ^{三百枚} 犬千代に被下候				廿八番	御装束からひつ	老對
松平長門頭				肥前守上御太刀 ^{支成} 御腰物 ^{実守} 御脇指 ^{長宗} 黄金 ^{三百}				廿九番	御なかへこし	三十二丁
内南之分				皮三十間犬千代上				長元切	長元なし卅式丁分 ^ニ 乘之衆次第	三十六丁
細川越中守	松平長門守	松平石見守	松平右京	御太刀 ^{正恒} 御腰物 ^{包永} 銀子五百枚 御袷五十 綿千把				御つほね		
松平宮内少輔	松平新太郎	松平石見守	松平右京	御能五番 御相伴衆丹羽五郎左衛門藤堂和泉守				小大夫		
内西之分				肥前守家老十四人御目見各進物有				御さ以の御方		
生駒老岐守	毛利伊勢守	戸川土佐守	山崎甲斐守	五月八日女御様御入内 ^ニ 而 ^一 松平右衛門大夫土井大炊頭五				なかとの		
稲葉淡路守	一柳監物	桑山加賀守	桑山左衛門佐	月四日御先へ発足雅樂頭掃部頭御供安部撰津守組共				すけた殿		
池田備中守	松浦肥前守	寺沢志摩守	大村松千代	^ニ 御供五月廿八日二条へ御着六月十八日 御入内						
秋原伯耆守	土方丹後守	松平新太郎	平岡石見守							

はま殿
のたとの
御たね
御きやくへ
御たま
御ふり
御ふう
御むめ
御さな
御こう
御この
おまつ
御いち殿
おさめ
おちや
おいわ
おひさ
むす
とら
いちや
かね
とく
かつ
いや
あけまき
きりつほ
むめかへ
以上三十二丁
わたくしのつものこしの次第
宮
よね
にて
まち
ちよふ

いし
ふちつほ
さか
しま
ちやう
こと
まさ
てん
ふち
さく
ちやあ
こわ
いま
いさ
ろく
あちや
かち
まゆ
ちやちや
いちや
かつ
はる
くら
あや
くろ
たく
まつ山
あ己
まさ
まさ
きさ
むや
以上三十六人
右之分十八日午刻以前ニ御先へ参十八日雨ふる朝少ふる
又御入内之刻少ふる其間ハ雨しきり也
左白丁
右白丁

さうしき
楽人 廿三人
右白丁
唐橋侍 笠持
極騰 同
持明院 同
舟橋 同
難波 同
松木 同
綾小路 同
榎司 同
中院 同
勧修寺 同
樋口 同
久我 同
園 同
竹屋 同
藤谷 同
中山 同
冷泉中将 同
飛鳥井中将 同

廣橋殿
西三条殿
板倉周防守

さうしき
楽人 廿三人
右白丁
塩小路侍 布衣 笠持
久世 同
六条 同
四条 同
飛鳥井 同 侍従
山科 同
日野西 同
川鱒 同
小川坊城 同
西坊城 同
冷泉侍従 同
東坊城
甘露寺 同
鳥丸弁 同
正親町 同
徳大寺 同
水無瀬中将 同
滋野井藤右衛門佐 同

山下弥藏
平賀三五郎
秋浦長藏
小林権平
同 安房守
同 河内守
同 周防守
三宅越後守
岡部内膳正
松平右衛門大夫
土井大炊頭

小笠原右近大夫

御隨身是々歩行二面

村雲右京

大山玄蕃

村田因幡

村雲備前

土山将曹

調子将監

土山将監

調子主膳

調子越前

判官衆歩行二面

姉小路判官

堀川判官

北面歩行二面

速水采女

河端左衛門大夫

大津左衛門大夫

世続甲斐守

速水長門守

井家撰津守

御つふの召次

米津彦七郎

山本四兵衛

庄 与左衛門

御牛飼

御車

御のりそへ
権中納言殿
御いとの御方

御車副

退紅持

後騎

大澤少将

酒井雅樂頭

松平主殿助

御隨身同上

調子将曹

村雲采女

小野主馬

鈴木老岐

調子右京

調子蒔生

三上将曹

小野左近

調子筑後

土山駿河

同歩行二面

町口判官

勢田判官

北面歩行

松波庄九郎

岡本美作守

速水右京

速水右近

山形右衛門大夫

河橋佐渡守

山形加賀

同

加藤市六

安部左吉

権田小三郎

御牛飼

御車副

搦持

後騎

井伊侍従

本多縫殿介

本多美濃守

牛飼

白丁

御供車

おか殿
おやくの御方

あふの殿

兵部卿殿
小室相殿

同車

同車

同車

同車

同車

同車

同車

諸大夫

関白殿

なかへ

御杓持

えふしき侍

近衛殿

同

一条殿

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

松平下総守

牛飼

白丁

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

鳥丸大納言

廣橋大納言

西園寺大納言

三条中納言

西洞院宰相

廣橋宰相

柳原宰相

花山院宰相

伯二位

諸司

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

右辻堅之次第

二条御屋敷向之堀川前東北二百八十間

二条大橋

同北へ百三拾間

同北へ百五間

同北へ七十三間

此間下立置橋

同北へ百五間

同東北百九拾間

此間中立うりの橋但此橋者もとり橋と云 此時

名をかへ万年橋と申候

油小路

東百五十一間

西洞院 新町通ふ家院迄

其間諸町通 烏丸薬院扱内裏也

禁裏様へ御進上

小笠原右近大夫

井伊掃部頭

夏冬の御装束

銀子

女院様へ御進上

銀子

銀子

右御入内見物可申ために五畿内伊勢伊賀近江をかき

り男女老若数万千群集仕京都之繁昌十倍す

禁中へ御進上御装束之覚

御ひきなをし

せいかうの大口紅

以上

御かむり同糸い共

御ひきなをし

御あこめ

御うちはかま

以上

女御様へ御進上之御装束之覚

御かさ之一ツ

御あこめ一ツ

御おひ一ツ

御ひとへ一ツ

御うへの袴一ツ

御かさねの袴一ツ

御こき袴一ツ

御五ツ衣一ツ

御単一ツ

以上

御帯

御かさ之

御五ツ衣

御帯

御五ツ衣

御帯

御五ツ衣

御単 白綾さひわびひし

御うわ衣 もへきうき折きりから草

御から衣 きつかうのおり物うわもんあふひの丸おぢ

御もつけさひきこし 御かけおひのうらかうばい

御かうけつのも いろすわうせんしそめうらきはふたへしろ

御うわ衣 もいきのうき折ふたんからくさうらすわうのす

御うら衣 おもてかめのこうわもんあおひの丸しろ

御こうちき おもてすわうあつたきつかうあをいの丸

御ほそなか おもてあやすすしのうら松竹

御も しろきせいかうに松竹つるかめのろくせうゑ有

御か之あけのおとらうく これにかけおひかめのかうにうわもんあおひの

以上

おはかま

おこうちき

御ふそなか

以上

御とのい物

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

御ひあふき式本

同

足不叶候て御奉公不申上候間父知行之内二万石分置

三男隼人筑後守罷成父跡令相続候處今度相果跡知行

行被召上候

九月七日若君様大納言御補任御名乗家光二男若君様宰

相御徳に御名乗忠長水戸殿少将御補任御名乗頼房

同九日御祝儀之御樽上諸大名御礼有

十二月最上駿河守子息源五郎義俊若輩故無行儀家

老之異見をも不用我ま無事計如候はば家可及破滅

と難儀仕時分遊君之數多船にのせ自船を漕浅草川筋御

御船手衆之船頭と口論いたし令打擲舟を漕出し逃の

き候間跡迄したひ屋敷申断候此事諸人存知候間如何様

終に著身代可為滅亡と沙汰有之

十六日とうかね御鷹野池田帯刀為御使御さかな御進上

公方様

当初神田台御堀普請惣奉行松平右衛門大夫土手普

請奉行阿部四郎五郎也

十一月二日増上寺観智國師遷化此弟子廓山了のとして

名僧二人有廓山小石川傳通院之住持了の京百万遍住

持此兩人之内國師之跡へ被仰付可被下由申置廓山權

現様御前能候へ共当上様之御機嫌不宜其上國師も内々

了的増上寺附属申度候由依之先当年増上寺之住

持不被仰付

十一月廿五日神田臺御堀普請御見物御出

十一月十日廿二日迄打続雪ふり申候但小雪

廿六日伊澤吉兵衛御步行頭被仰付

十二月十四日松平大隅守於横須賀死去当時駿府御城

代也季七十二

江戸通丁火事十五町不と

閏十二月尾張殿紀伊殿江戸御城中之御屋形御普請出

来御向所当年より御参勤尾張殿へ左中水戸殿其

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

次紀伊殿御屋敷各美麗之御成御門被立

元和七年^{丁酉}

正月元三之祝式如例

一 同二日御誦初 四日御茶之湯初 六日出家社人御礼有之

一 廿日御具足の御祝ひされ歌有之

一 廿三日曉尾張殿新屋形より火事令出来不殘炎上其

餘炎後の御堀を越伊達正宗上秋景勝松平長門守鍋嶋

信濃守同紀伊守同和泉守嶋津大隅守真田伊豆守戸沢右

京森美作守南部信濃守秋田城之介成田左馬助大田原備

前守大関右衛門大夫溝口伊豆守田中筑後守浅野采女正

寺沢志摩守松平宮内大輔仙石兵部少輔大名屋敷廿三間一

日一夜炎上

一 廿九日火事^ニ逢候大名何も銀子被下

一 火事之為にもいよいよ下々迄たは等御法度

一 二月被仰付所替岡部内膳老万六千石御加増丹州龜山

より同国福知山へ移松平将監龜山へ移有馬玄蕃自

福知^山・久留目^{江移}

一 菅沼織部自長嶋江州膳所へ移老万石御加増

一 同三月増上寺へ傳通院之廓山被仰付

一 同十日桑山加賀守 西の丸様^江当代無双の早馬勝

山と申小駒^{栗毛}一疋致進上げにも御むま屋に是程

の早馬無之と申御感悦不●

一 細川越中忠奥令隠居後号三濟子息忠利代親

一 父か領豊前国之由被仰出

一 三月七日大雨降電大^ニ鳴晚方晴又大風吹候て終夜

不止房州豆州^ノ渡海之船悉御破滅人数百人死

一 本多上野介宇都宮の城致拝領普請丈夫^江仕来年

一 戊午 権現様御年忌^ニ日光へ御参詣可被成候間其

前^ニ城普請御成御殿結構^ニ造営可仕と存日夜無油断稼

申候上野介親父之代より及二代御家老仕御政道忠功無比

類候得共代々堅一向宗^ニ仏神の儀など崇敬申事無

一 此候此宇都宮の城^ハ昔より宇都宮弥三郎代々居住の城

一 ^ニ候得共上代^ニ取立られ其頃鉄炮なども無之候^ニ付

一 此城^ニ罷在候鉄炮出来仕候てから宇都宮^ハ戸久自良

一 の城に有此城も代々の城^ニ候間弟の芳賀伊賀守を置

申候是^ハ宇都宮明神山^ノ鉄炮打候得者本城^ハととき

申候間それに令奉遣戸久自良^ニ罷在候今度上野介

是を聞明神山を打崩しはるかのわきへ社を引可申

由と申付家老武井九郎右衛門令奉行人足をあげ山

を引申処^ニ寔^ニ神道の不思議^ニ候哉人足共悉俄^ニ

相煩伏倒候て引申事不叶奉行も短氣成人にて急に

人足を入かへ候得共様々奇特之事之候て終に引申事

不叶候

一 宇都宮の先主奥平千福殿母儀^ハ上様御連枝殊^ニ権

威高き御後室也今度古河^ノ所替^ニ付^ニ宇都宮^ノ程近く

候間家中衆皆御屋敷之木竹を切取戸障子畳迄古河

へ運取申候上野介家老共是を見て是^ハ国替之作法

一 背き申候由^ニ道^ニ関を居候て取返し申候間奥平殿

衆令立腹争論^ニ及ひ申候奥平殿御後室被聞召御女

儀^ニ御坐候殊殊之外御腹立候て上野と申悪敷奉行衆

へ内々被仰通公事^ニ可被成由被仰候得共其内^ニ被指

置候

一 宇都宮の城外曲輪^ニの丸三の丸丈夫^ニ申付見事^ニ出来

前代未聞之由申候本丸之儀^ハ不得御意候得共御成御殿

造営仕上^者普通^講不可苦と存結構に普請仕候乍去屋^ハ憚

も御坐故夜中にも普請仕候

一 上野御加増拝領之時大坂^ニ罷在候根来法師百人召抱申候

頭分之根来大蔵と云組頭^ニ根来少納言と云是^ハ紀州根

来寺之牢人^ニ忍ひの役鉄炮何^ノ上手也宇都宮^ハ奥

の御堅め^ニ候間か様之者を召重々も公儀への御忠節

之由にて抱下し日頃^ハ軍役計^ニ無役之由也然共今

一 年普請日夜いたされ家中之侍不殘役之者を出し申

候根来にも普請仕候へと被申付候へ^ハ根来共一味仕普請

役迷惑之由^ニ不罷出候武井九郎右衛門申^ハ皆之い矢

さまの役人^ニ候間外曲輪^ハ是非普請いたし候て可然

候間やとひ分に被出可給と申^ニ付^ニ根来共普請仕候其

一 後本丸へも出候得と申付候得^ハ何^ノ刀をさし罷出普

請仕候是^ハ武井九郎右衛門罷出候得^ハ打果候はんと^ノ事

一 之由見得申^ニ付^ニ百人の根来をたるめ候て一人^ニ五三人ツツ

一 取手を付置皆召捕候て成敗仕候組頭大蔵^ハ別条無之候

一 春の頃^ノ

越前宰相殿日頃殊之外酒狂被成人を切小姓衆数多

一 捧^ニ御打殺し被成不知其数^ニ公方様近き御一門其上

御習^ニ御坐候^ニ付^ニ諸人恐をなし子細迄不申候得

共遠聞之通^者金作と申遊君を御取立被成御酒宴之

相手^ニ被成御心乱初申候籠中之小鳥^ニをあたへ候て

籠の外へ鳥頭を出しをひろい候処を小刀^ニ鳥之首

を御切其後大成鳥を包丁^ニ御切是を面白思召人を御切

被成毎日子供を打擲不知其数其後永見右衛門と申者

一 背御意殊ありて引籠居申候所へ打手を御むけ火を

かけ焼打^ニ被成岡田源左衛門と申者も背御意事之候^ニ

付^ニ永見右衛門所へ走入一所^ニ打死申候か様之儀重々

仕候はば御家滅亡たるへきと諸人申候

一 去々年より申分御坐候最上駿河殿跡源五郎儀終に

者^ノ落着申候其次第^ハ源五郎若年故無双之好色^ニ大

酒^ニ日々遊宴計もおとなしき家老共異見申候得

共用られす候間は^ニ家督^ニ難立候間駿河守殿舎

弟^ニ山邊右衛門と申人貞心にて器重人^ニ御坐候間はを

家督^ニ望申度由家中過半存候爰^ニ日根野備中と

一 申者最上駿河守存生之中小出頭も仕候是^ハ源五郎

祖父出羽守殿死去之時分此備中を末子の山邊右衛門^ニ可

附由遺言被申候得共駿河守殿相口^ニ先々かり分^ニ差

金右衛門^ニ不被附候今度代替^ニ日根野備中右衛門^ニ附

可申と迷惑に存何とそ附不申候様^ニ案し候處^ニ出羽

守代より出頭申候女申し候^ハ駿河守殿死去之時分能を御

一 覽被成菓子なとまより其後血ををはき御煩御果被成候

毒をまより候かと存候然共其時之御菓子^ハ鮭延越前新

聞因幡^ノ方より上り申候と覚申候此衆普代衆^ニ候間毒

に^者不可有と申備中聞其様を書付候へ^ハ毒之舐吟味仕

度由頼候て女中^ニ書付をいたさせ請取最上一門松

根備前と相談して鮭延越前等右衛門尉を取たて

一 可申ため駿河守殿^ニ毒をかひ源五郎殿^ニ惣事を申かけ

候證拠是也と彼状をいたし候間松根備前^{源五郎}

一 附て部屋すみより奉公申候者共一味同心して山辺右

衛門鮭延越前を相手にいたし公事^ニ罷成右衛門方

一 家中三か二程有之對決度々候へ共毒害之證拠一圓無之只

頓死之躰也對決之時每度主之患事頭はれ申候

十月廿七日嶋田兵四郎米津勘兵衛方々内證あり右衛門

越前^一一味之者共明日召連可致登城候源五郎^二若手

^三大分之人數故色々申分も候間御知行被召上六万石

可被下候間仕置等万事能仕候はば源五郎成人之後

國をも御返し可被成候由^四上意有之候間兩人一味之者共

御請可申上由被仰付則御返事申上候へ^五此段何とも

御請難申上候松根備前日根野備中等^六切腹被仰付

被下候はば可乘^七其俣罷在其上源五郎身躰御知行被

召上何を以御請可申上候哉我等共御暇申上出家仕高

野へ参可申上と申切候て御請不申候

翌日土井大炊頭方へ被召寄井伊掃部頭土井大炊頭を以

^八源五郎國を被召上於江州^九五千石源五郎^十被下三州

五千石母儀^{十一}被下合老万石縣命之地押領家来何

御預^{十二}罷成候

山邊右衛門大夫 松平宮内^{十三}御預

松根備前守 立花飛騨守御預

小國日向守々大膳^{十四} 鍋嶋信濃守御預

野邊津遠江守 加藤肥後守御預

立岡甲斐守 細川越中守御預

日根野將監 藤堂和泉守御預

上ノ山兵部 黒田右衛門佐御預

本庄豊前守 酒井雅樂頭御預

大山筑前守^{十五} 兩人^{十六}

鮭延越前守 土井大炊頭御預

新関因幡守 土井大炊頭御預

氏家左近 松平長門守御預

子息小左衛門^{十七} 兩人

其外數多有之^{十八}付^{十九}略之

禁中にて皇朝類苑と申御書物判木^{二十}被仰付何^{二十一}公家衆

学文仕候衆へ被下公方様へも一部被遣候金地院は被召寄

於御前^{二十二}所々^{二十三}談^{二十四}失^{二十五}講尺仕候其中^{二十六}三河守大江定基出

家いたし為求法入唐仕候得^{二十七}唐之天子殊の外崇敬仕

候て圓通大師と申号を授候由此書之中^{二十八}在之寔^{二十九}日

本之名譽なるへき由御感被成候

同月暹羅國より使者を進上申候此國^{三十}天竺之中^{三十一}申候

日本へも折々賈船を渡し申候文字などは各別之物

一字もよめ不申候殊之外^{三十二}積迦の像を崇敬申候赤き

珊瑚樹のをく成小豆を持来当地にも是を植候へ^{三十三}

三年過実のり候由申候

今度御國替之衆百石^{三十四}付老疋老人^{三十五}一日路可相送之

^{三十六}并奉公人之儀不寄上下國替之所迄今供主人^{三十七}相談之上

可令帰國又無違乱可召返事

年負未進方^{三十八}取仕候男女之儀式拾ヶ年過者可為譜代事

未進^{三十九}取仕候もの其俣^{四十}残置男女縦主人之所にて生候子

成共七才迄^{四十一}可付父母事

未進^{四十二}無之者親兄弟譜代にくれ候男女せんさくに

て於無紛者譜代勿論之事

去年之未進之儀当正月より四月中^{四十三}先地頭可為所

務五月より以後可奇破事

元和七^{四十四}四年

十一月三日大御所様為御鷹野東金へ御成 將軍様^{四十五}が土

井左兵衛為御使御肴御進上

十二日御所様還御

元和八年^{四十六}正月朔日大雪降当年^{四十七}尾張殿紀伊殿御在

国水戸殿御在江戸之間明六ツ水戸殿御登 城其次松平下

野守殿同伊豫守殿御出仕其頃御譜代大名衆也

早天水戸殿御出仕^{四十八}於上檀初献御盃水戸殿御頂戴

之時呉服御拝領御坐之方^{四十九}江向御礼

松平下野守松平伊予守其外御譜代大名御盃頂戴呉服

拝領

二日諸大名御礼 同晩御謠初也六ツ時分水戸殿御登

城

御長袴御上檀^{五十}御坐 初献御盃水戸殿御頂戴被成^{五十一}とを

二献御盃水戸殿御頂戴^{五十二}とを

三献^{五十三}御盃水戸殿御頂戴^{五十四}とを其次御家門

三日證人衆御礼也

四日代官衆御礼

四日於西丸 大納言様^{五十五}御礼御盃之次第

初献御盃水戸殿御頂戴御前へ上松平下野守頂戴御盃御

前へ上御盃松平伊予守頂戴御前へ上納

二献御盃水戸殿御頂戴御前へ上御盃下野頂戴伊予守納

三献御盃伊予守頂戴水戸殿へ其御盃下野守頂戴納

五日御茶之湯始

六日社家出家山伏等御礼

七日町人等御礼 御鉄炮初

廿日御具足之祝御連歌発句

松の葉やあり数にへん世々う春 紹之

二月六日近藤石見守於小田原死去^{五十六}

二月十五日佐野修理御國御免^{五十七}從信州帰参

三月五日松平隱岐守於國相煩火急之間自 將軍様土

井左兵衛為上使桑名へ被遣

今年 權現様七回忌之御法事御坐候付^{五十八}日光へ御参詣

就其御横目衆より御法度書出

條々

今度御供之時不可脇道^{五十九}於町通家之際左右を除て可令供

奉若違背之於^{六十}あらは過料として銀壺枚可出之事

喧嘩口論大事其外如何様之儀出来候といふとも番頭組

頭之下知なくして其身之事^{六十一}勿論下人等に至迄不可出

之若於相背輩^{六十二}可為曲事

路次中御着座之刻馬よりおり馬^{六十三}其所に置供之者を通し

其次に馬を通し其後諸道具を通すべし若違背のやか

らあらは為過料銀子壺枚可出之事

今度御供中人返之儀一切令停止●自然於召申旨^{六十四}還御

以後可及沙汰事

御着座之時当番之外御供すへからず自然相背之者有之

者銀子壺枚可為過料事

御目付之面々^{六十五}番頭諸奉行之儀^{六十六}不及沙汰縦いか様のも

の中といふとも御法度之旨不可相背若狼之輩におゐて、

為過料銀子壺枚可出之事

一 馬上之際に召列かちもの事馬取二人くつ持老人持鎧
老本さうり取老人此外若黨を可召達事

一 付騎馬の中へ乗替之馬不可引入但有御用被為召者
之馬へ可為各別若相背輩有へ銀子老杖可為過料事

一 組頭無之者之分へ間として日行事を定殿中可相詰自
然狼之輩あらへ銀子老杖過料たるべし

一 御供之時馬之口をとらせ井高聲徒へからざる事
付馬に聲をかくへからず御泊之町にて馬の口あ

一 らふへからず若違背之輩にをめては銀子老杖
の過料たるへし

一 諸道具入まじり通へからず自然狼之輩於有之へ銀
子老杖の可為過料事

一 小荷駄馬者右之方を可通但山坂にてへ小荷駄を山の方
へ付て可通事

一 不可押買狼藉若違背之輩にをめては可為曲事
作毛之場に馬を放へからず違背の族有之は隨其輕
重可出過料事

一 御目付之者番頭諸奉行過料可出儀見通聞通令用
捨者銀子式杖右之面々可出之事

一 右可相守此旨者也
元和八年
戊 四月日

一 公方様卯月十二日光江御參詣 十二日晴 岩付御泊
十三日晴 古河御泊 十四日晴 宇都宮 十五日晴

一 今市御泊 十六日雨 日光着御 十七日晴 御祭礼 十八
日雨 十九日晴

一 日光御逗留中古河奥平千福殿御母儀様々何事や
らん御注進有之井上主計頭方へ申来是へ内々本多

一 上野介と奥平殿国替之儀付不快之儀御坐候間
遣恨罷成宇都宮近所御坐候付其節堀伊賀守

一 御預内奥平内罷在候付堀伊賀守上野方無
調法成儀上之御ため不可然事共有之様子書立候て被

一 進候尤御女儀候へ共御連枝之甲斐御坐候御ため
御大切思召か様之儀被仰上候事御感不斜候由申候

一 堀伊賀守宇都宮人を付置不審たて申候事色々御座候
中にも人の存知候事上野介大名罷成候得共鉄炮数多
所持不被申奥方之御堅めに罷在鉄炮不足如何と存上方
数多求候て忍ひてそそろ物包下し申候事

一 御成御殿殊之外高く仕縁の下見通仕人も通候様仕候
城之番所番之侍迄申付ひしを毎日つくらせ候事

一 根来同心一日之中何にも密事を存知候て如此仕候
哉と不審存候事

一 城之普請を夜中にも仕候事何とそ普請のいたし様密
儀も御坐候哉無心元存候

一 今度宇都宮へ着御之節色々佐法不審御坐候是御供の
面々可被存候

一 右か様の事共数々條申參候所此段御尋も御座候はば一々
申わけも可有御坐候得共免角上野介運命尽申候哉今

一 度始御成殊御機嫌能御罷あかり無残所仕合候処
御馳走之餘り御殿之戸鎖をつけ申も如何又付不申候
も大切存候てくろくをいたし申候然御庭へ御出被

一 成候時くろく落戸明不申候良久敷して漸々明申候是
を存出し候てか様之儀普請之由御前被申候人あり又

一 御着之当日に上野介被入念を若大勢取紛候て火事出
来候得者大切之由存候て宿々番を付御城御膳過

一 申迄皆火を消させて御膳過候て火をたて申候当日非番
之足輕大将内藤外記永井清右衛門同心古河御先へ參

一 候得共宿々火を消候て荷物もとかせ不申炎天之節病者
なども候て茶など給候はんと湯を望候得共不叶候間宿

一 と及口論候か様之事不思議にも存候哉土井大炊頭家老
寺田与左衛門と申者旅宿に不宿候て待共数多野陣仕

一 馬鞍置夜を明し用心仕候間か様之儀皆以不思議存
候處宇都宮より注進有之付井上主計頭かやうの

一 事を存出し色々申上候間御不審思召還御に御泊
不被成十九日今市より壬生へ御通り此日井上主計頭と

一 宇都宮へ參り御殿へ入方々見廻り候て罷通申候廿日に
者壬生より岩付御泊廿一日江戸へ還御

一 御本城御普請付上様自日光直西丸へ入御 大納言様
從西丸本多美濃守宅へ御移

一 五月九日穴山梅雪之後室見性院於武州足立郡太間
木村死去是竹田信玄女也穴山殿権現様と御懇意被
成候間子息勝千代早世之時

一 権現様御子おまんとのを養君申請号武田然穴山殿
滅亡之後おまん様御果候て荒川甲斐守殿を申請為養

一 子為智荒川殿早世之後無之松平越中守を申請其跡
定候処此見性院隱居屋敷高松丸殿誕生之由聞へ

一 御臺所より見性院御勘道ありて太間村五百石懸
命之地被下高松殿を抱隠し置候処見性院相果申

一 候間高松殿預置可申方も無之候間土井大炊頭致分
別信州高遠城主保科肥後守を招寄高松殿を養子

一 いたし家督相続可然由令相談肥後守悦ひ則請取信
州へ同道す

一 右肥後守元来無男子候間舍弟彈正を養子にいたし候
へ共心性不屈肥後守に不幸候て義絶いたし其後養

一 子も望不申一跡已絶可申かと申候處大炊頭分別を
以養子相調肥後守満足仕候

一 当年六月中霖雨冷氣如初春依之諸人相煩候事無
限就中紀伊殿去年より御国御坐候て散々御煩頃日者暗

一 き所を御好成御引籠被成御氣分重り申候由達
上聞板倉内膳正為上使紀州へ遣候

一 大坂御城御普請外曲輪之石垣多門大形出来只今本
丸二丸之石垣取懸申候間御蔵共可被立由大坂當番之

一 番頭高木主水松平大隅守方へ被仰遣御蔵十二被立
普請奉行大番衆之内より富永喜左衛門横地勘丞

一 兩人被申付今年大坂御番阿部左馬助
越前宰相殿去年より御酒狂以之外候へ共今年御參勤

一 又日光御年忌為御參詣御国御発足被成濃州関ヶ原迄
御出候得共御病氣之由御逗留候て御下向無之候間本多飛

一 騷守御異見申上候へ共無御承引それより越前へ御帰国飛
騷守を御改可被成御用意御坐候間飛騷守ひそかに丸岡を

一 罷在城に子信濃守を指置京都へ参板倉伊賀守此由
申伊賀守周防守令相談若宰相殿より討手參候はば京

一 都之騒罷成候間洛外居住可然由申付江州栗崎罷在候

同七月三日加賀肥前守殿御内室御公方様御果男女之御子数多御坐候御法号

天徳院殿乾運淳貞大禪定尼

同四日五日参勤之諸大名御愁傷之儀ニ登城并肥前守亭ニ群参

同七日七夕之無御礼 江戸中火花火なし

加賀之御姫様御早世之儀御食傷之由是ハ御局人ニかくし色々悪食物を上申候由にて御局并御膳ニ付申候女及生害

去年没収被仰付最上城請取可申ニ而七月十九日日本多

上野介鳥居左京永井右近江戸発足内藤左馬丹羽五郎

左衛門戸澤右京以下之奥衆最上ハ可参由 被仰付河崎と申所ニ而待合可申由何も相談ニ而下向

最上ハ下向之衆道ニ而待合候ハ共鳥居右京ハ御上使を待合二日路跡ニさかり延引候間本多上野介と先ハ入本城請取申候処ニ八月朔日伊丹喜之助高木九兵衛為

御上使被参候間本丸を御上使ニ相渡上野介ハ外曲輪上の山兵部屋敷ハ罷出候同二日上野介方ニ而御上使兩人同道之大名衆上野介振廻被申候其座ニ而御上使最上領

何も大名衆ニ被下候書付を取出し何にも被申渡候内ニ上野介も由利二万石銀山豊前跡ニ而御上使最上領増かと存候處ニ而宇都宮十五万被召上候由被申渡候上

野介驚被申候躰也其時御とかめ之條目を取出し誑聞せ被申候上野介殊の外短氣成人ニ而候間定而御上使と存分も被遂申かかと御上使衆も存候処ニ而上野介殊之外令平

伏御条目之儀共皆以 公儀之御為ニ而仕事ニ候處某宿運之究一々蒙御不審様ニ而罷成今更行当迷惑仕候由申由利ハ被参候道ニ而供之者少ニ而おさハ荷物も被当家老与力皆浪

人仕武井九郎右衛門以下旧切之者少ニ而参候
十月廿五日被下候所付之覽
最上領廿五万石 鳥居左京亮

庄内十三万八千石 酒井宮内少輔
棚倉五万石 丹羽五郎左衛門

岩城十万石 内藤左馬助
宇都宮十二万石 奥平千福

新庄六万石 但此中三万石 御加増 戸沢右京

常州松岡二万石 御加増御拝領 水戸殿

松岡領老万石 堀伊賀守

堀伊賀守ハ大久保相州之時御勘氣大坂陣にも松平下総守手ニ而高名仕候ハ共不被召出宇都宮罷在其後古河ハ参千福殿御袋様ニ被仰付今度御忠節申上被召出御知行拜

領仕堀市正と改名仕候千福若輩之間萬事指引可仕由被仰付
上野介罪科之事脇ニ而誰も不承風説も無之候ハ共十一ヶ

条御座候由申候 風説ハ第一本城之普請不得上意して新敷仕候事福嶋大夫御勘氣之節上野承ニ而申次自分には不得上意候事殊ニ而今度御法事ニ付福嶋事

御託言申上候又ハ鉄炮をかくし中山道より忍び忍び下し申候事
是全逆心の儀ハらす奥の御ため被仰付候間一入武具をも数多支度いたし御用ニ立可申候ためと存候由

御殿の戸にくる候を付候事不審被思召候
御着被成候時分城下の火をしめし候事
是御難過不申候内ニ右大勢入込候ハ火事無心元存候由ニいたし候ハ共却御普請罷成候

御成前ニ而根来衆百人一度ニ而成敗仕候事尤上野介家来候ハ復答成敗仕段不苦候ハ共若此内ニ而上野介悪儀をも存知候者有之ニ而一度ニ而皆成敗をも仕候哉之事

御殿を高く造申候事
ひしを数多用意仕候事不審ニ而被思召候かやうの事共之由及承候

八月廿一日西丸
同廿二日 大納言様河越ハ初而御成
廿三日 為上使河越ハ被遣

大納言様於河越御機嫌の所ニ而御鷹野被成候由 御供之衆青山伯耆守家来と中山勘解由家来と喧嘩仕相果

申候由
八月廿三日最上山形之城殊之外破損仕候付従 公儀本城二丸御普請被仰付御普請奉行ハ池田圖書花房弥右衛門等也

同廿八日 大納言様河越より還御甲斐様板橋迄御連御出それより又西丸ハ御越大納言様西丸ハ御目見ニ

御出甲斐様於西丸殿様ハ御目見

九月三日柴田筑後守御勘氣御免ニ而上州足利より罷帰候是ハ権現様御代時与力共五人罷出柴田公事仕柴田負ニ成与力ハ被召出殘ニ而力同心共イ土岐山城御預柴田ハ御改易足利

罷在号願軒十月十二日御目見
十月十四日松平石見守駿府城代被 仰付并石見跡大番頭ハ安部撰津守被 仰付

十一月十日新御城御普請出来西丸より公方様御移徙大納言様西丸ハ御移

十一両日御祝同十五日 大納言様初而御具足召加藤左馬奉着御太刀 御馬をも進上

其後紅葉山権現様ハ御参詣
今日又京都ニ而女御様御袖を御とめ御額をなをし之由御祝義之御樽着御金時服御進上大沢少将為御上使

同十八日十九日御祝儀之御能有之諸大名ハ御太刀上九條殿下向

十二月八日勅使中院中納言通村下向
同日根来同心百人成瀬伊豆守ニ御預
同月十二日尾張殿江戸御参勤

右根来ハ紀州根来寺之僧也昔より此寺弓矢を取武勇をたしなみ紀州にて度々一揆を起し信長之御時悉御退治被成候て根来寺滅亡いたし候学頭ハ小池坊ト智積院者通れ出わきにて蜜々所化を集め学講をたて申候

弓矢を取し衆徒ハ武家になりて方々ニあるにつぎ大坂乱之時分も数多竈城いたし候 権現様御代ニ而被召抱成瀬隼人ニ御預被成又大坂前にも被召置候て伏見ニ而番仕ル其後根来之頭大納言言御殿様大納言様トと愛染院

と伏見ニ而罷在ニ而其後愛染院相果根来右京と預罷在候處ニ而今度根来同心ハ被召下成瀬伊豆守に御預被成根来右京ニ而於泉州御代官被仰付子息之小才次ハ久敷江戸

相勤御奉公申候
同十一月田中久兵衛永々病氣故在江戸難成存候ニ而付普沼主殿助を致養子二万石之知行相渡し京都ハ隠居仕度由御訴訟申上候ニ而付則隠居御免被成主殿助を養子

仕知行 江州野洲郡老万石三州田原ニ而都合式万石也
五千石上州新田にて五千石

一 普沼主殿助儀大坂御陣之御致御供先へ參致高名候間
其節御加増可被下候處主殿助殊之外いんけん申候を御に
く之被成御加増取不申候然^三か様幸御座候て俄^二二万石
取大名分罷成候

一 同十一月三日被仰付候御役人御小姓組之組頭

一 井上主計頭組 組頭 本多美作守

一 永井信濃守組 組頭 酒井下総守

一 青山大藏少輔組 組頭 秋田長門守^{手時次郎九郎}

一 松平右衛門大夫組 組頭 太田采女正

一 板倉内膳正組 組頭 鳥居讚岐守

一 秋元但馬守組 組頭 三浦作十郎

一 右小十人衆迄當番きりに支配仕候

一 十二月朔日田中主殿頭御小姓頭被仰付

一 同日岡田兵部少御歩行頭被仰付阿倍撰津守跡

一 十二月三日酒井雅樂頭御加増拜領上州藤岡湊沢二万六
六千石合十二万石

一 同讚岐守御加増七千石上州深谷城合老万石を領

一 元和九年^{癸亥}正月朔日御本丸御礼之次第朔日明六ツ大納
言様甲斐宰相殿奥^ニ御礼被仰上御盃相濟 公方様

一 出御上檀^ニ御座初献御盃尾張殿御頂戴盃御前へ上

一 御盃水戸殿御頂戴盃御前へ上松平伊予守頂戴納

一 御加有之 初献之御加過尾張殿水戸殿呉服御拜領二献之

一 御盃尾張殿御頂戴其次水戸殿へ其盃松平伊予守盃備前

一 宮内少納^加三献右同別之御盃出藤堂和泉守被下納

一 今日御譜代大名御礼

一 二日諸大名御礼 同日御謠初七ツ半尾張殿水戸殿御登

一 城御譜代衆着座

一 初献御盃尾張殿御盃水戸殿それよとをる

一 二献御盃水戸殿御盃とをる

一 三献御盃尾張殿御盃とをる

一 三日證人衆御礼

一 四日西丸 大納言様御家門御出仕尾張殿水戸殿何茂
御盃之次第

一 初献御盃尾張殿御頂戴盃御前へ上御盃水戸殿頂戴盃松平伊予

一 御盃尾張殿御頂戴御前へ上御盃水戸殿頂戴盃松平伊予

一 守夫順々とおる備前守宮内少納

一 御加有之

一 二献御盃尾張殿御頂戴御前へ上御盃水戸殿頂戴盃松平伊

一 与守それより順々にとをる

一 三献御盃尾張殿水戸殿それより順々にとをる

一 五日御茶之湯初

一 六日社家出家衆御礼

一 廿日御具足御祝御嘉例之御連歌^音公家衆も列座

一 陰あふく松高殿や千々の春 紹之

一 国民の戸も長閑なる時 御

一 久かたの光にもれず雪紛て 久我大神^西 敦通

一 二月初松平伊予守へ被仰聞 御意越前宰相儀近年

一 我偃罷成家来共致成敗病氣之由申江戸へ參勤不申

一 道より帰国付飛騨守是非參勤可然由及陳言候^音却^音

一 立腹仕飛騨守を可令成敗之由不得 上意永見右衛門令生

一 害国^音騷候段不儀之次第^音思召候也兄之儀^音候間其方

一 參れ謀国之治申様^ト御意成竟以難有

一 上意^音奉存候宰相儀兄^音御坐候得共天下の御ために^音か

一 へかたく奉存候我等^音被仰付被下候はば越州へ罷下致す對面段々^音

一 申聞せ異見仕取て押籠申様^音可仕候定め 合点申間敷

一 候左様^音候はば人手にはかけ申間敷と御請申上候間殊之外

一 御機嫌能候^音者其段可然候然共早々左様^音被仰付候て

一 世間之聞へ如何^音思食其上宰相殿御息仙千代殿 上様の

一 御孫^音御坐候間一ツ^音此御ためにて候間先御母儀様清瀧

一 院殿を下候て何とそこしらへ国を出し候て其後返し不

一 申候様^音と被仰付候間伊豫守母儀をたのみ越州へ下し

一 被申請瀧院^音伊与守にも母儀也宰相殿隠居候ても仙千

一 代殿^音御孫也伊豫守殿^音子也兎角越州^音無相違段御納

一 得あり則越前へ下り宰相殿^音對面あり先急江戸へ御參

一 勤可被成由色々御異見候得共初^音更^音御合点無之其後再

一 三之御異見^音兎角此まま病氣之由^音本國被成候て^音江

一 戸への御申わけ難成候間少之中成共敦賀迄御出有^音

一 不叶病氣故參勤不被成候趣違^音御訴訟可然由宰相殿

一 出頭人田伏監物其姉^音落合藤右衛門を以御合点のま以

一 るやうに委細被仰越候得^音宰相殿醉人^音候得共さす

一 がに御母儀之御意尤と思召けるか江戸へ御申わけのた

一 めに敦賀へ御出被成候去程^音本多飛騨守入違越前へ入

一 候て御国を仙千代殿へ被下宰相殿を隠居被仰付候間

一 御国へ返し申間敷由御上意之趣家老面々家中^音国人

一 申渡所々に番を付置申候間宰相殿敦賀にも御安堵不

一 被成御出頭人等其外御供六十計被召連同年五月初め

一 京へ御出六條本國寺^音御旅宿被成候

一 二月十三日尾張殿御普請出来公方様初^音御成御相伴

一 衆水戸殿藤堂和泉守酒井雅樂頭夜之曙^音捨露地へ御

一 越御成を御侍尾張殿も御出何も捨露地の外口^音御待

一 公方様捨露地のくつろけ^音御駕より御下り被成露地

一 へ入御被成候水戸殿和泉守御供申御教寄屋へ入御之時御

一 草履水戸殿御なをし公方様掛物置形御一覽被成御坐^音

一 御つき水戸殿和泉守^音勝手口之一帖敷之をしこめ之所

一 御なをり掛物置形を居座よりのそき御覽 扱御膳

一 出御中立之時^音和泉御先へ罷出御草履をなす水戸殿

一 御跡^音御出和泉守次第能候と申 御茶之次第

一 公方様被召上尾張殿御頂戴それを水戸殿まいり和泉

一 守被下納薄茶なし御茶過くさりの間へ出御之時^音水戸

一 殿御先へ御立勝手口の戸をあけきさはしの本々伺公

一 被成 公方様くさりの間へ出御被成^音合かさり御一覽

一 水戸殿和泉雅楽にも見申候へとの御詠^音一覽被成御

一 先へ御出長袴めし候

一 公方様御長袴めし御成り書院へ出御 公方様御進物共尾

一 張殿御頂戴三献之御祝出 初献御盃尾張殿御頂戴之

一 時御腰物御脇指御拜領其盃御前へ被召上御盃水戸殿

一 御頂戴御肴御拜領其盃御前へ上り納^音何も御加有之

一 三献過七五三之御膳出御相伴尾張殿水戸殿和泉守蓬菜

一 のかさり臺の御盃^音 公方様被召上其上御盃尾張殿

一 御頂戴其盃 御前へ上候時尾張殿より御腰物御脇指

御上其盃水戸殿御頂戴其盃御前へ上御盃和泉守^ニ被下
納扱廣間へ出御尾張殿よりの進物をも御覽被成御
あひの戸たち御かけにて尾張殿家老ともに銀子呉服
被下其後右之者共 公方様へ御札申上御能初御能過
其戻還御尾張殿水戸殿和泉守外露地の戸口迄^者たし
にて御伴翌日諸大名振廻五之三大廣間^ニ而^ニ之能過亂
酒也

同十八日大納言様同所へ御成御相伴甲斐宰相殿水戸殿
藤堂和泉守御茶過くさりの間へ出御七五三の御膳
大納言様御かけわん尾張殿甲斐殿水戸殿三方膳和泉
守足打膳

若君様^ヲ被下 御太刀 國行
御腰物 長光 御脇指 來國俊
御宿^ル物 拾 銀子 五百枚

甲斐宰相様^ヲ尾張殿へ進物
御太刀 眞長 御腰物 安吉 御脇指 來國光
御小袖 武拾 黄金 三拾枚

大納言様^ヲ 相應院殿へ進物
越前綿 二百把 銀子 百枚
御教寄屋之粧

虛堂墨跡
かちの釜
たな布袋 香合 羽はうき
炭入て ふくべ
さねのおれ花入

大納言様御花あり東の懐の中^{白玉模}
つのかしら水さし
しきの御茶入 かんたうの袋入

茶師院盆
こゆ之御ちやわん
なみたの茶杓
竹輪めん通柄杓

大納言様御炭あり
くさりの間之御粧

織部硯
定家の御賀記
ひつか
高麗筆
からすみ
くわんせうのしもく
しさへ

はけいの御かま
袋たな^ニ
せいし水さし
大しりふくら

はいかつきの天目
あまかさきたい
ふやあうろのふた置
ひさく

織部さしやく
とうこの間の粧

大川の自画自讃の跳布袋
しよく
青磁唐のかうろ^{蓋匠獅子のつまみ}
いとかま
やうへんの天目

中次
青磁の水さし
青磁のふた置
せいかへの水こふし
ひさく

御成書院
くわんひ口のなすひ
たい天目
御廣間

かうのたいかへ
たい天目

大納言様へ尾張殿^ヲ御進上物
御太刀 長光 御腰物 眞宗 御脇指 玉吉 御小袖 武拾
黄金 五拾枚 御馬 黒一疋 御鞍置

甲斐宰相殿へ尾張殿^ヲ進物
御太刀 景光 御腰物 長光 御脇指 信國 紅糸 五千斤
銀子 三百枚

公方様御成之時
十三日御能組
高砂 福王 大助三 大 左吉
七太夫 八嶋 山科 小新九郎 ふへ又三郎
七太夫 江口 権右衛門 小左衛門 ふへ兵衛
七太夫 紅葉狩 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 百萬 福王 小左衛門 太 惣右衛門
七太夫 橋弁慶 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 祝言 弥次郎 小清二郎 太 左吉

竹生嶋
きやうけん
せんし物
しせんせき
ふくろう

十四日御能組
加茂 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 友長 権右衛門 小長右衛門 太 惣右衛門
七太夫 玉かつら 福王 大助三 太 惣右衛門
七太夫 道成寺 山科 小左衛門 太 惣右衛門
七太夫 祝言 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 祝言 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 祝言 山科 大庄九郎 太 惣右衛門
七太夫 祝言 山科 大庄九郎 太 惣右衛門

狂言 あそふ 弥右衛門 よね市 仁右衛門
こか かもせいこやとんくら 徳右衛門

同 狸々 同

同

同

二月鳥山城主成田左馬助親成死去子息無之弟内記ニ跡被仰付被下候様ニ相賀淺野采女御訴訟申上候得共御目見も不仕候弟ニ遺跡被仰付候例無之由ニ而知行上浪人仕候

去々年之春より大坂御城御普請三年ニ而外曲輪石垣多門出来本丸二九天守之土臺出来候へ共御殿一圍出来不申今手御上洛之間其前ニ先段之御殿たて御成被成御覽候て其後本御城御たて可被成由ニ而小堀遠江守奉行被仰付かり御殿之御普請初

五月六日上秋彈正少弼ニ亡父景勝跡知行被仰付 今年就御上洛御法度書出

條々

今度御供之時不可脇道并町通家之際左右を降て可供奉事

喧嘩口論火事其外如何様之儀●為出来番頭組頭之下知なくして其身之事は勿論下人等に至迄一切不可出事

今度御供中人返之儀令停止●自然於有中旨者選御以後可及沙汰事

路次中御着座之刻馬よりをり馬は其所に置供之者を通し其次に馬を通し其後諸道具可通事通料 銀老枚

御着座之時当番之外不可御供事通料 銀老枚御目付之面々并番頭諸奉行之儀 不及沙汰縦如何様之者申断といふとも御法度之旨不可違背事由事

馬上之際に召列歩行者之事馬取二人杏持老人草履取老人持鎗老本此外若黨可召列事

付騎馬之中へ乗替之馬を不可引入但有御用被為召者之馬へ可為各別事

御供之時狼藉者之儀其身へ可為死罪主人可為過料事御供之時馬之口をとらせ并高聲すへからさる事

諸道具入交通へからさる事

小荷駄馬は右之方を通すへし但山坂ニて小荷駄を山の方へ付て可通事

監不可剪採竹木事

作毛之場に馬を放置へからさる事

右條々若有背族 随科之輕重或死罪或可為過料自然御目付之者番頭諸奉行人見通聞通令用捨者可出過料しや猶下知状可相見者也

元和九年五月十一日

越前宰相殿五月五日京本國寺迄御出被成候処板倉周防守方より江戸より豊後國を隱居分ニ被下越前をは仙千代殿ニ被下候間豊後へ御越可被成由ニ而 中国大名衆人数を以取巻豊後へ送り申津守と申所ニ而 四方 柵を二重ふり口一方明懸命之地五千石被下竹中采女正奉守護之自江戸御使番衆為御横目参相詰罷在候宰相殿入道被成号一伯越前へ為横目阿部四郎五郎嶋田兵四郎参今年中罷在候

五月十二日 公方様御上洛江戸御免足十五日駿府御逗留自大納言様道中御機嫌伺ニ土井左兵衛為御使駿府へ参

松平老岐守ニ亡父石見守跡六千石 定番被仰付

今度兩上様御上洛付御供之衆すくなく御坐候相座大勢被召出小十人之御奉公被仰付若殿様へ五十餘人被召出當御城にて御小姓組御書院番之組頭衆則當日御番之小

十人衆をも支配被申候然共御供之路次第大勢にてふれも如何太儀ニ可被存由ニ而 俄小十人衆之内にて路次計ふれ

なかし可仕由被仰付道中かりの筆頭被仰付候四人四組にいたし支配仕候齊藤金七西山八兵衛八木庄兵衛三浦小左衛門等也

於江戸大納言様之小十人衆松平甚三郎筆頭之西山八兵衛をあなとり令悪口其段横目へ所候へ者則申達甚三郎切腹被仰付

七月朔日内藤修理亮疱瘡ニ而死去兄若狹元和三年

相果無子して弟修理ニ被仰付修理又相果無子

同十三日大納言様御上洛藤沢御泊今日御供之小十人衆之内太田七之助と申者乱奉仕候哉相番伊吹平兵衛と申者を突殺自害仕候日頃入魂ニ而 何之遺恨も無之由

御留守之内西丸の下馬を乗なから通り候者候間御門番衆何者そと尋候へハ甲斐宰相殿御家来依田十左衛門と申者之由御城中を不存桜田へ罷通申候由ニ而 下馬仕候然共御番衆より其由宰相殿家老衆へ申越様子委細穿

鑿仕候へ者此仁元來信州葦田衆ニ而 山家居住之仁ニ而 江戸不案内不調法之儀ニ候へ者よのつねの事ニ候はば御宥免も可有御座候へ共 上様御留守之儀殊ニ御城ニ而 之事ニ而 候へ者勞難差置由ニ而 還御之後切腹申候

当年大坂御番阿部撰州牧野内匠組ともに七月十六日令免足御跡急罷上候

森舊記東武實録作十三日は也

同廿三日 大納言様伏見へ御着座 廿四日二条へ御成公方様へ御目見

七月廿七日於伏見 当公方様へ將軍宣下之次第

勅使伏見へ参向

勅使東帯ニ而 長柄 京々東帯を着す

着坐五人衆何茂長柄

三條大納言御玄關迄長柄ニ乘り殘四人中御門迄乘

雑色四人京々伏見迄三條大納言長柄之先を称る

御年寄衆御玄關迄御迎ニ出

公家衆各々殿上之間ニ着坐

御廣間御縁ニ昵近之公家衆伺公其後 大納言様 出御

御太刀 大沢少將

御腰物 吉良左兵衛督

御廣間御上檀 御着座 三條大納言上卿 勅使 正親町頭中将 勤修寺奉行 参仕衆 右五人下段 着座 大納言様之御左之方座 内大臣之宣旨 大外記中禮迄持参吉良左兵衛督請取 坊珠大内記 將軍之宣旨 御前ニ上 御頂戴被成石之御脇被為置

所を明何^ニ罷出候其中^ニ浅井半兵衛と申者一人残留御番所^ニ罷在候是^ハ伯耆守親父播磨守所^ニ罷在候^ニ

大御所様御若手之時播州御家老仕候自分右之半兵衛切^正

御覽被成御覚被成候間先手播磨守^ニ与力御預之時分御門

^ニ御覽被成被懸御詞を無冥加仕合と諸人申候是^ニより

別之与力より^ハ加増ありて二百五十石取申候左様之儀

所奉存候由申自分之幕を打御番所を明不申候間御

感^ニ被思食後^ニ半兵衛被召出候^正^{寛永四年}^{千八百二八}

十二月四日夜盜あり四番町^ニ大原左近右衛門子^ニ源次郎三

十郎其妹兄弟三人其母以上四人切殺し財寶金銀悉取候て

夜打^ハ皆落行申候右之左近右衛門十年以前^ニ相果其後後

家かんりやく成女房^ニ人をも皆出し下々^ニ三人^ニ殊の

外金銀をため申候間是を存候て夜盜參候誰も不存候処^ニ

夜盜とも長持など打わり申おと隣へ聞へ申候間近隣^ニ

おき合參見申候得^者上下切殺し候中^ニ後家^ハ浅手^ニ

蘊生申候其後後室かひかひ敷方々尋候て二年めに悉く尋

出盗人罪科に被行申候

同十月水戸宰相殿御国^ニ御頃被成候間御醫者玄琢を水

戸へ被遣候

十一月十九日京都女御様御平産^{皇女}

大御所様御意^ニ青山伯耆守総州阿き戸^ニ相州溝口へ

移^リ中^ニ一年^ニ遠州へ被遣候

御城^ニ御奉公之御帳 付申候是^ハ公方様御代替^ニ

御坐候間非番にも罷出御奉公申上候はば御目にもたち可

申かと存大番衆之中小林権太夫永井勸九郎と申者初^ニ

罷出 御城へ日參仕候御帳之付申候時分^者早天^ニ一度日

中^ニ一度七ツ時分^ニ一度御夜詰^ニ一度合^ニ四度宛付申候大

番書院花畑衆小十人入かへ入かへ登 城仕於御城御出頭人

朽木民部池田帯刀佐野左京此三人一人宛罷出居申候又横

目衆内藤久五郎堀田勘左衛門堀因幡守井上清兵衛秋山十

右衛門宮城甚右衛門此中一人つつ罷出居申候此衆之前^ニ

御帳^ニ付申候若俄之御成御坐候得^者登 城之面々何^ニ御

供^ニ罷出候此頃之御本丸之御家老衆酒井雅樂頭同讚岐

守 内藤伊賀守 稲葉丹後守也

十一月晦日女御姫宮御誕生之由為御祝儀御樽肴黄金御

小袖被進御使^者吉良上野介自駿河中納言殿松平隼人為

御使此時禁中^ニ上野介被任中將隼人正被下四品但駿河

中納言殿御家老皆從五位下也隼人御家老より上階如何

との儀にて四品無御免^{実ハ此言則御早世之間兩人共ニ}

駿河殿衆朝倉筑後守懸川之城捍領^{致逗留江戸へ申上辭退任候也}

伊丹喜之助為上使羽州へ下向是^ハ本多上野介於由利二万

石被下候へ共今亦二万石被召上同国大沢と申所千石被下候

由利二万石^ハ岩城忠二郎捍領

本丸^ニ三枝宗四郎 稻垣藤七 中根傳七 鶴殿新三郎四

人小十人組番頭被仰付

廿八日織田兵部大輔被任少將

同日植村出羽守大番頭被仰付^{高木主水}

十二月晦日堀田加賀守正盛十六歳叙從五位下任加賀守